1453年のトルコ人によるツァリグラード征服についての物語
――中世ロシア文学図書館（Ⅴ）――

三浦　清美・平野　智洋

はじめに

1453年5月29日、2か月にわたる攻城戦ののち、「征服者（ファーティヒ）」と讃えられるスルタン、メフメト2世に率いられたトルコ海軍は、かつて史上最強であったビザンツ帝国の首都コンスタンティノープルを疾風のごとく征服した。この国の運命は長らくまえに決せられていた。15世紀のはじめまでに、オスマン・トルコ帝国はバルカン半島、小アジアに着実に自らの支配領域を広げており、ビザンツ帝国は首都の周り、黒海の南西沿岸、中世において「モレアス」の名称で知られるペロポネソス半島に、わずかな領土を維持しているだけであった。

にもかかわらず、コンスタンティノープルの陥落はヨーロッパのあらゆる民族にたいして強烈な印象をあたえた。この事件をあつかった多くの書のなかできわめて重要な意義をもつのは、中世ロシアの歴史書である『コンスタンティノープル征服についての物語』である。この書は才知あふれる作であると同時に、ドゥカス、ゲオルギオス・スフランヅィス、ラオニコス・カルココンデュレスらギリシア人の歴史家によるコンスタンティノープル征服の歴史記述とならんで、事件にかんする貴重な史料となっている。

この物語の作者にかんする学者たちの見解はさまざまである。物語の種々の写本のなかの一つのあとがきに、作品の作者はスラヴ人ネストル・イスカンデルであると記されていたことから、この人物を作者であるとする説がある。ネストル・イスカンデルは「若いころから」トルコ人の捕虜となり、コンスタンティノープル包囲の目撃者、参加者となった。しかしながら、多くの学者が、長い期間にわたりトルコ人の捕虜となり、祖国の文学的環境から切り離されていた人物が、これほど高い文学技法をもつ作品を創作したのは不自然であると考えている。この作品では、文学作法のさまざまな規則があたりまえのように守られ、伝統的な言い回しが多用され、状況にふさわしい主題上の葛藤が醸成されていて、それが実際の事件の流れと矛盾することもめずらしくはない。こういったことはみな、文学的才能ばかりではなく、作家としての訓練や広範囲にわたる読書を必要とするものである。

こうした事情のために、ネストル・イスカンデルがこの作品の成立にどれだけの役割を果たしたのか、この人物は作品により大きな権威をあたえるために神秘めかして加えられたものにすぎないのではないのか、という問題は、議論の余地が残されている。間違いのないことは、コンスタンティノープルの滅亡にまつわる諸般の事情をよく知っていた、15世紀の卓越したロシア作家の作品が、私たちの眼前に厳然と存在するということである。

この物語の写本は二つの編纂本で知られている。この二つの編纂本はテクストどうしの関連が

たいへん近く、共通のオリジナルにさかのぼることができると考えられている。イスカンデルがあらわれるのは、16 世紀の三位一体写本（РНБ, Троице-Сергиевой лавры, №773）のみである。この写本は作者についての付記をのこしている。また、これが属する編纂本の物語はしばしば、1512 年編集のロシア年代記（フロノグラフ）の最終章となっていることから、「フロノグラフ」版と名づけられることがある。

ここでの翻訳は三位一体写本によるものである。大修道院長レオニードの 1886 年の版では、原本から逸脱する箇所が多く見いだされたので、翻訳者である O.B. トヴォロゴフはそれを訂正し、そのきわめて個性的で伝統的ではない写本の書き方を統一した。

また、パレオロゴス朝ビザンツ帝国史を専門とする若き学究、平野智洋氏に、ビザンツ学者から見た本作品の価値についてご議論いただいた。氏のおかげで注釈もたいへん充実したものになっている。ご尽力にあつく御礼申し上げる。当然のことながら、すべての文責は三浦が負うものである。本作品の翻訳は、『電気通信大学紀要』に連載してきたシリーズ「中世ロシア文学図書館」の第 5 集として、『エクフラシス』別冊 1 号に掲載される。

作品解題：ネストル・イスカンデル『1453 年のトルコ人によるツァリグラード征服についての物語』叙述内容と史料的価値（平野　智洋）

オスマン朝による 1453 年のコンスタンティノープル陥落・ビザンツ帝国滅亡は、当時の重大な事件として、ギリシア語 (ゲオルギオス・スフランヅィス、ラオニコス・ハルココンディリス、ドゥカス、ミハイル・クリトヴロス他)、ラテン系諸語 (ジャコモ・テタルディ、ニッコロ・バルバロ、ゾルジ・ドルフィン、ヒオス司教レオナルド他)、トルコ語 (トゥルスン・ベイ、ネシュリー、エヴリヤ・チェレビ他) など諸言語の各種史料に記録されて現在に伝わっている。現在の研究において、これら史料の価値はおもに、(1) 事件描写の正確性・客観性 (ことに両軍兵力の記録、戦闘状況の描写)、(2) 事件の歴史的解釈とそれを裏づける歴史観、以上のふたつの観点から判断されている。

ネストル・イスカンデルの名で伝わる、『1453 年のトルコ人によるツァリグラード征服についての物語』と題されたロシア語記録は、著者の同定およびその攻防戦参加にかんする議論はあるものの、ビザンツ・イタリア・オスマンといった主要当事者の立場を離れた記録として、上記の観点からも注目に値する史料である。

構成上の特色として、この史料はロシアにおける世界年代記叙述の伝統に連なっており、この著書それ自体が創建から陥落にいたるツァリグラード－コンスタンティノープル史を網羅している。おそらく創建から初期の歴史は、すでに定番として用いられている史料からの引用に多くを拠っているものと思われ、それらが含んでいる事実誤認や錯誤がそのまま引き継がれているという難点が存在する。とはいえ、この箇所の評価は、歴史叙述の正確さそのものに置くよりはむしろ、本作品が読者として想定したロシア人知識階級の、コンスタンティノープル史を包括的に一

望せんとする要求に応えるかたちで構成されたという点に求められるべきであろう。

本作品のこうした史料的性格を踏まえつつ、以下、冒頭に掲げた観点から、その史料的価値について論じてみたい。

(1) 事件描写の正確性について

事件描写の正確性という点で、本作品の評価は複雑である。

軍事的側面からは、他史料との整合性がおおむね認められている。両軍の基本的な布陣について、および全般的な戦況の推移にかんしてはおおむね正確である。しかし、他史料で言及される重要な事件、たとえばオスマン艦隊の陸送 (レオナルド、トゥルスン、エヴリヤらによる記録) や、包囲の続行をめぐるオスマン陣営での意見対立 (テタルディ、レオナルドらによる記録) について、本作品は沈黙している。両軍の戦力にかんする具体的な数値はいっさい示されていないが、いくつかの戦闘における戦死者数が記されている。女性やアルメニア人住民の戦闘参加については単独の証言となり、その信頼性についてははかりがたいが興味深い記述である。

戦闘の時間的推移にかんしても不整合が見られる。とくに、包囲戦の開始日 (4 月 4-5 日) についての言及が欠落している一方、陥落当日の事件を劇的に描写するための演出的な措置であろうか、5 月に主要な事件をすべて縮約させようとする傾向が見られる。他史料では、5 月 29 日の総攻撃中に起き、戦局を決定したと明記されている傭兵隊長ジュスティニアーニの負傷離脱が、前日に起きたものと記されているが、これは恐らく誤認とみられる。

著者は防衛側・攻囲側双方にかんする一定の知見を得ており、人名・地名・官職名など精密な叙述を心がけている。そのなかには、本作品にのみ言及のある人物や、あるいは他史料での言及がわずかな人物の名前 (たとえば、ニコラオス・グデリスの帝都総監在職記録や国務長官スフランヅィスにかんする言及など) が記されているなど、独立証言・傍証を含み高い史料的価値を認められる部分もある。他方、オスマンの軍司令官－州知事 (ベイレルベイ) と県知事 (サンジャクベイ) 在職者名の混同が見られ、戦闘の初期ないし中期段階で解任された海軍提督バルタオウルが最後の総攻撃時にも言及される一方、実際には包囲戦を戦い抜き、のちの遠征でも活躍したエメル・ベイやイシャク・パシャが戦死したとの記述があるなど、個々の人物にかんする記述の不正確性も指摘されねばならない。これはビザンツ側についても同様で、実在しない総主教「アナスタシイ」－アタナシオス 2 世や皇后 (個人名の言及なし。なお、架空の皇后については、ムスリム側史料であるエヴリヤにも言及がある) が、重要な役割を担って登場する。こうした固有名詞の混乱は、著者が得た情報の整合性を確認しないまま記したり、或いは当時の俗説をそのまま取り入れたりしたためと考えられる。人物名に関しては単独の証言も少なくなく (ランガヴェ、軍務長官の息子アンドレアス、トマス・パレオロゴス・アサネスなど)、それらの信用性について検証することは、今後も研究者の課題でありつづけるであろう。

本作品の記述においてもっとも独自性と重要性が認められるのは、長い攻防戦の毎日の記録という体裁と、そこに巻きこまれたほぼすべての人々の行動記録であろう。具体的には、著者は、

攻防戦のあいだじゅうに神品 (聖職者) や在俗の非戦闘員また女性らによって行われていた祈禱、糧食、戦死者遺体の取り扱いなどについて記している。さらに、帝都陥落直前の総主教と皇帝の対話も注目される。この対話は、当事者たちが信仰者として、今まさに進行中のこの重大な事件をどのように解釈しようしていたかをあらわすという点で、後述する歴史観の問題とも絡み、大きな意味合いをもっている。コンスタンティノープル包囲戦が第一に軍事的な事件である以上、史料が戦闘の記録、すなわち、戦闘員の活動記録を中心に叙述し、研究者もまたそうした状況を中心に分析することは当然であろう。しかし、防衛側自身の記録が示すように、防衛側戦力は圧倒的に少数の兵力で戦わざるをえず、したがってそれを上回る非戦闘員が、その命運を共有しつつ、それぞれの立場で戦時生活をつづけていたということに思いをいたすならば、むしろ本作品のこの記録は、通例光の当たらない、戦時における非戦闘員の記録としては他史料に劣らぬ独立史料証言といわねばならない。

(2) 本作品の歴史観

本作品の歴史観は、疑いなくコンスタンティノープル陥落を、住民の邪悪と罪に帰するキリスト教的「神罰論」の一典型である。これは、当時のキリスト教徒には広く共有された観点であったが、その視点についてはいくつかの相違も存在している。

ラテン人 (ローマ・カトリック教徒) やドゥカスのような教会合同推進派の視点からは、ビザンツ人が教会合同を拒絶した分離派ゆえの罪によって帝国滅亡を招いたと論ずる (例えばヒオス司教レオナルド)。他方、オスマン統治下最初の総主教ゲナディオス 2 世のように正教の伝統を重んずる者たちは、帝都陥落が異端 (すなわちカトリック) との合同に対する神の怒りであるとの解釈に立った。これらの、教会合同をめぐる特定の問題に滅亡論を帰する論者たちとは別に、一般的な人類、キリスト教徒の罪に陥落を帰する記録者 (ビザンツ・ギリシア人) も数多く、これは複雑な神学論議・教会制度の問題にたいする関心や知見にこだわりのない当時の一般的な市民・住民たちの視点を反映しているといえるであろう。

本作品の神罰論は、うえに挙げたなかでは第三の、もっとも一般的な解釈に近い。そこには、教会合同をめぐる問題はいっさい取りあげられていないのが特徴である。同じロシア人でも、すでにビザンツ諸帝の合同政策に対する非難を表明していたモスクワ、キエフ等の公や主教たちとは異なる視点をそこに見ることができる。またその叙述スタイルとして、単純に事件全体像にたいする、結論としての神意の反映 (即ち神罰) ではなく、最終的な陥落にいたる過程でのさまざまな事件にも、こまかに神意が織りこまれていることも指摘されねばならない。こうした本作品の表現方法は、信仰者としての対話 (上述) や祈禱の言葉を多数引用する方法とともに、教会で日常に行われる説教の形式、あるいは聖人伝の形式をある程度取り入れた結果であろうと思われる。

また神意の発露として、とくに陥落直前にはさまざまな超自然的現象が現れたことが強調されるが、これは同時代史料のいくつかと共通しており、新奇さよりはむしろ定番としての要素であ

ると言える。このような綿密な神意への言及を背景として、本作品はその末尾で陥落の歴史的解釈を提示する。そこでは、あらためて帝都の陥落が不可避の神意によるものであることが提示されるとともに、当時の東方正教会で流布していたいくつもの解釈が並べたてられる。ここで言及される、帝都の創建と滅亡を二人のコスチャンティン (コンスタンティノス) に関連づける予言、そしてパタラのメトディオスらによる黙示録的解釈には、同時代ビザンツ史料などとの共通性・並行性が認められる。同時に、この事件にたいする将来的な復讐者としてルーシ－ロシア人を据えたくだりは、帝都陥落に対するロシア人の考えを反映した、本作品の独自的な点と見ることができる。

(3) 書物としての評価

これらの特色を総合したとき、本作品はどのような立ち位置をえることになるであろうか。すでに示されたように、叙述の様式と内容にかんがみて、本作品には聖人伝・致命者[1]伝の要素が色濃い。交戦した両軍の戦力・兵員数については触れられていないのにたいし、戦死者の数、著名な戦死者、刑死者の名前が逐一明記されていることは、「致命者芳名録」としての性格を示していると思われる。そしてこの叙述の主役を占めるのは、皇帝コンスタンティノス 11 世パレオロゴス帝 (在位 1449-53) であり、信仰をめぐる総主教との長い対話、出陣前の祈りと英雄的な戦いぶりが、彼の殉教にいたる過程として描きだされる。いうなれば、本作品は歴史書に組みこまれた聖人伝 ——「殉教者皇帝コンスタンティノス・パレオロゴス伝」であり、歴史と信仰を不可分のものとして包含しつつ、読者たるロシア人に向けて信仰のための伝言を届ける役割を担っている。

今日の実証史学的立場からみた歴史解釈評価という点では、神罰論を退けた二人のビザンツ史家、古典的歴史叙述の伝統につらなるハルココンディリスの徳性・運命論や、外交家の視点に立つスフランヅィスの国際関係論的解釈に合理性が認められ、必然的に高い評価が与えられている。しかしながら、教会合同にたいする立場をその価値判断に加えることなく、被造物としての人間が共通に受けるべき不可避な神罰に陥落の原因論を反映させたことは、本作品著者の、公正な視点を保証すると同時に、おそらく当時最も広く東方正教世界において受け容れられた見解に立つものとして、「同時代的な解釈」を考慮する上では十分な史料的価値をもつものと言えよう。

---

[1] 東方正教会における殉教者のこと

翻訳

5803年[2]、神のご加護を受けた偉大なるフラヴィウス・コンスタンティヌス[3]がローマに君臨していたとき、大いなる熱誠をもって放逐されたキリスト教徒たちを津々浦々から集め、キリスト教の信仰を揺るぎなくし、それを広め、神の教会を飾り、そのほかの建築物を建立し、偶像を毀ち、偶像の家を神の栄光のために改築しはじめた。これに加えて、多くの法令を発布し、異教の神殿はキリストの司祭たちとキリスト教徒たちだけが所有し、取り仕切ること、水曜日と金曜日はキリストの受難を記憶して斎戒をおこない、日曜日はキリストの復活を祝うこと、ユダヤ人たちはけっして供犠をしてはならないこと、キリストの十字架への不敬にあたるから、いかなる者にも磔刑の判決を出してはならないこと、ユダヤ人たちはいかなる者も奴隷を購入してはならないこと、金貨にはコンスタンティヌス自らの肖像を刻むべきことが定められた。いたるところでキリスト教徒たちには大いなる喜びが湧きあがった。

統治の13年目[4]、神のご教示に奮い立ったコンスタンティヌスは、自らの名前を担う町を建設すること[5]を思い立ち、そうした町を建てるのにふさわしい、栄えある由緒正しき場所を探し出し、選ぶために、しかるべき人々をアジア、リヴィア、ヨーロッパに派遣した。彼らは帰還して、皇帝にさまざまなすばらしい場所の名を挙げたが、なかでもマケドニアとビザンティウムを褒めたたえた。コンスタンティヌスはトロイア[6]についての考えに執着を示した。なぜなら、そこでギ

---

[2] 西暦紀元前5年。ビザンツ帝国で使用された暦法「世界暦（ビザンツ暦）」にもとづく。この暦法は東方正教世界各地で使用され、本作品もこれに倣っている。この暦法では、旧約聖書『創世記』の記述にもとづいて世界の創造を紀元元年とし、これを西暦紀元前5509年9月に置いている。年初は9月、年末は8月となる。Oxford Dictionary of Byzantium (hereafter ODB.), pp. 448-449. コンスタンティヌス大帝の在位は、西暦306年2月以降のことであるから、この記述は誤りである。

[3] ローマ皇帝（在位306-337）、ガイウス・フラヴィウス・ガレリウス・コンスタンティヌスのこと。コンスタンティヌス大帝とも呼ばれる。全名はエウセビオスによって確認することができる。『教会史』（下）講談社学術文庫、210頁。キリスト教の歴史記述は、この人物をキリスト教という新しい宗教の熱烈な庇護者として描いてきたが、実際は、キリスト教が迫害される宗教から寛容に接せられる宗教となり、最終的に崇敬される宗教に変わるプロセスは段階的なものであった。キリスト教徒に信仰の自由をあたえた313年のミラノ勅令は、コンスタンティヌスも署名しているとはいえ、コンスタンティヌスの共同統治者であったリキニウスによって発布されている。

[4] コンスタンティヌス帝がビザンティウム遷都を挙行したのは330年5月11日のことで、副帝即位から24年目、正帝即位から6年目のことであり、本作品の記述は正確ではない。

[5] コンスタンティノープルは小さな町ビザンティウムを拡張、整備したものであり、あたかも新しい都市を建設したかのような記述は不正確である。ビザンティウムは町の名、マケドニアは州の名であるが、後者はガレリウス帝（在位305-311）の居所であったテッサロニキを示唆する可能性がある。アレクサンドロス大王との連想からその名をあげられた可能性も否定できない。いずれにせよ、ネストルの地誌学、地理学、古代史の知識はかなり不正確である。おそらく、口承や特定の史料からの情報をあまり検証せずに用いたと思われる。

[6] ホメーロスの『イリアス』に歌われる、トロイアをめぐるアカイア人（ギリシア人）とトロイア人の戦争を念頭においている。ローマの伝説上の王ロムルスが、陥落したトロイアから脱出したアエネアスの末裔である

リシア人によるフランク人にたいする全世界的な勝利が成し遂げられたからである。このように皇帝は昼となく夜となく考えに耽り、夢のなかで「コンスタンティヌスの町[7]を建設するのはビザンティウムがふさわしい」という声を聞いた。

眠りから飛び起きると、皇帝は直ちにビザンティウムに親方たちと都市の建築師たちを派遣し、場所の選定をおこなわせた。副帝[8]である自らの二人の息子たち、コンスタンスとコンスタンティヌスをローマに残し、甥のアダマンタス[9]はブリタニアに派遣して、皇帝自身が自らの母ヘレナをともなってビザンティウムに出立した。母ヘレナ[10]とともに、自らの妻でディオクレティアヌス帝の娘のマクシミナ[11]、自らの息子コンスタンティウス[12]、自らの姉の夫リキニウス[13]、自らの二

という口碑から、トロイア人をラテン人と同一視する発想は古くから存在していた。また、中世ロシアにおいては、「フランク人」はラテン人（イタリア人）を指したから、トロイア戦争はギリシア人のラテン人にたいする勝利と位置づけられた。

ちなみにコンスタンティヌスはラテン語を母語とするローマ人であり、トロイアの勝利と遷都を結びつける発想をもちえなかった。これは、コンスタンティノープルを首都とする帝国がギリシア化したあと、ロシア人がこの地と接触をもったことを示唆している。

7　コンスタンティヌスは当初より自らの名を冠した都市を建設する考えをもっていたわけではなかった。彼が目指したのはあくまで「新しいローマ」であり、この町を「コンスタンティヌスの町」とするのは、後代の時代認識を含むアナクロニズムである。

8　ディオクレティアヌス帝（在位284-305）のもとで、ローマ帝国は4分割され、ふたりのアウグストゥス（正帝）であるディオクレティアヌス、マクシミアヌス（在位293-306）、カエサル（副帝）であるガレリウス（在位293-311）、コンスタンティウス・クロルス（在位293-306、コンスタンティヌスの父）によって統治された。コンスタンティヌス（大帝）が死ぬと、末子コンスタンス（在位337-350）が正帝としてイタリア、アフリカ、パンノニア、ダキア、マケドニアを統治したが、配下の将軍マグネンティウスが蜂起し殺された。一方、兄のコンスタンティヌス2世（337-340）はやはり正帝としてガリア、ブリタニア、ヒスパニアを統治したが、コンスタンスと争い、イタリア侵入を企てるが、失敗して殺された。

ちなみに、本作品における皇帝称号にはいくつかのヴァリエーションが見られる。コンスタンティヌス帝の称号としては、ロシア語で一般に皇帝を意味する「ツァーリцарь」と、四分統治以前の皇帝の称号「カエサルCaesar」に由来する「ツェサーリцесарь」が併用されている。コンスタンティノス11世にたいしても同様である。「カエサル」号は、四分統治時代に副帝кесари の扱いに降格となり、ビザンツ時代には皇子にあたえられる最高位爵位となった。11世紀以降は皇族全般、さらに外国君主（東方の君主やスラヴ系君主の事例が見られる）にも授与される比較的高位の爵位に降格され、14世紀末に事実上消滅した。ODB., p. 363.

9　この人物の詳細は不明。この名の人物は、コンスタンティヌスの親族としては知られていない。

10　コンスタンティヌス大帝の母エレナのこと。

11　ディオクレティアヌス帝の娘として確認されるのは、ガレリウス帝の妻となったガレリア・ヴァレリアのみで、マクシミナなる人物の実在は疑われる。

12　コンスタンティウス2世（在位337-361）のこと。コンスタンティヌス大帝とファウスタの子。コンスタンティヌス2世、コンスタンスが争いで倒れたあと、簒奪者マグネンティウスを廃して単独政治を確立する。その後も親族の粛清を断行し、生き残ったユリアヌスが後継者となった。アリウス派を支持し、アタナシウスを迫害した。

13　コンスタンティヌス1世の共同統治者で、コンスタンティヌス1世の異母妹フラウィア・ユリア・コンスタ

人の弟ダルマトゥスとコンスタンティヌス[14]、ダルマティウス[15]の息子ダルマティウス[16]、コンスタンティヌス[17]の二人の息子ガルスとユリアヌス[18]を連れて行った。

ビザンティウムに到着すると、この場所には7つの丘と海に入り江がたくさんあるのを見た。そして、山を切り崩し、低い場所に土盛りをし、入り江には石柱を立て、そのうえに覆いをかけ、土地を均すことを命じた。皇帝自身がビザンティウムに居を定めた。場所が準備されると、皇帝は貴族、顕官、親方たちを集め、どのように城壁、塔、市門を建造したらよいかを検討しはじめた。皇帝は三角形の場所を測量するように命じた。三角形はすべての辺は7ヴェルスタ[19]であった。なぜなら、この場所は二つの海、黒い海と白い海に挟まれていたからである[20]。

すると、見よ、突然穴から蛇が這い出し、そこここをのたうちはじめた。すると、ただちに上方から鷲が舞いおり、蛇を咥えると、高みに飛び立った。蛇は鷹の身体のまわりを締めあげた。

ンティアの夫。ディオクレティアヌス帝引退後の帝位争いで頭角を現し、コンスタンティヌス大帝の共同統治者としてミラノ勅令を発布してキリスト教を公認した。その後ふたたび多神教信仰に回帰しキリスト教を迫害したため、コンスタンティヌスと争って敗北し(324年)、テッサロニキに送られて処刑された。エウセビオス『教会史』(下)、299 −307頁。

コンスタンティノープル遷都はリキニウスの敗北のあとなので、この箇所でリキニウスが登場するのはアナクロニズムである。むしろ、リキニウスが最後に籠城したビザンティウムの地政学的利点に目をつけたコンスタンティヌスがここを新都と定めたというほうが正しい。

14　この二人の兄弟は、337年、コンスタンティウス2世に殺された。

15　コンスタンティヌス大帝の異母弟、フラヴィウス・ダルマティウスのこと。337年、軍隊が死去したコンスタンティヌス大帝の息子以外への服従を拒否したため、弟のユリウス・コンスタンティウス、および息子のダルマティウス、コンスタンティヌスとともにコンスタンティウス2世によって殺された。

16　フラヴィウス・ダルマティウスの子で副帝となっていたユリウス・フラヴィウス・ダルマティウスのこと。コンスタンティヌス大帝のもとでトラキア、ダキア、マケドニアを統治していた。337年に父、叔父、弟でアルメニア王となっていたハンニバリアヌスとともにコンスタンティウス2世によって殺された。

17　ダルマティウスの弟ユリウス・コンスタンティウスのこと。ネストル・イスカンデルはここでもコンスタンティヌスとコンスタンティウスを取り違えている。

18　この二人のコンスタンティヌス1世の甥は、幼少のために殺害されなかった。

ガルスは副帝（在位351-354）となり、コンスタンティウス2世の妹コンスタンティナと結婚し、シリアのアンティオキアに駐留したが、粗暴な性格による失政と謀叛の嫌疑のため召喚され、ポーラ付近のフラノナで処刑された。

ユリアヌスはコンスタンティウス2世の妹ヘレナと結婚し、ガルスが処刑されたあとに副帝（在位355-360）となり、ガリアに派遣され、武勲をあげた。兵士たちから信頼され、正帝（在位361-363）に推戴されたが、ペルシア遠征中に謎の死を遂げた。これによって、コンスタンティヌス朝は断絶した。ユリアヌスは、キリスト教を排斥し、ギリシア・ローマの伝統的な神々に帰依したため、「背教者」として知られている。

19　ヴェルスタверстаは1, 06キロメートル。

20　コンスタンティノープルは半島の先端に位置し、三角形をしている。南の一辺はマルマラ海（大理石海）に、北東の一辺は黒海（金角湾、ボスフォラス海峡）に面している。マルマラ海（プロポンディス）、ダーダネルス海峡をとおって南のエーゲ海に連なる海域を「白い海」と呼んだ。

皇帝とすべての人々は鷹と蛇とをじっと見ていた。鷹は長いこと視界から消えるほど高く舞い上がったが、降下するとふたたび姿をあらわし、蛇とともにさきほどと同じ場所に落下した。なぜなら、鷹は蛇に打ち負かされたからである。人々は走りよって蛇を殺し、鷹を救い出した。そして、皇帝は大いなる畏怖にとらわれ、学者と賢者を呼び集め、彼らにこの験（しるし）を物語った。

彼らは思案をめぐらせたのち皇帝に答えた。「この場所はセドゥモホルムィ（七つの丘）[21]と呼ばれ、この世界でほかの町と比較にならぬほど、大いに讃えられ、大きく発展することになるでしょう。ですが、この場所は二つの海に挟まれておりますがゆえに、海の波に洗われ、揺さぶられることになりましょう。鷹はキリスト教徒の徴で、蛇はムスリムの徴です。蛇が鷹を打ち負か

[21] コンスタンティヌス帝はローマを模して7つの丘と14の区を定めた。これは、のちにテオドシウス2世による新城壁建設にともなう市域拡大後も維持され、再設定された。なお、ローマの丘にはそれぞれ固有の名称があったが、コンスタンティノープルの丘には単純に第1、第2という序数がつけられたのみである。尚樹啓太郎『ビザンツ帝国史』28頁、地図1も参照。

しましたことは、ムスリムがキリスト教に打ち勝つということを意味します。キリスト教徒たちが蛇を殺し、鷹を救い出したのですから、このことは最終的にはキリスト教がムスリムに打ち勝ち、七つの丘を取り、そこに君臨することを意味するでありましょう。」

コンスタンティヌス大帝はこのことにひどく不安を掻き立てられたが、しかしながら、彼らの言葉を書き留めさせた。職人たちと都市の建設者たちは、二手に分けられた。一方の者たちには、町の城壁と塔の長さを測り、城砦を築城しはじめるように命じた。もう一方の者たちには、ローマのやり方にしたがって、通りと広場を測量するように命じた。かくのごとくして、神の教会、皇帝の宮殿はじめ、貴顕、重臣、高官たちの、そのほかの栄えある建物を建設しはじめ、水道でおいしい水を引いた。

7年目に皇帝は、町に住む人々が少ないことに気づいた。なぜならば、町はもう十分に大きかったからである。そこで、次のようなことをおこなった。人を遣わして、ローマやほかの国々から錚々たる貴顕や重臣と呼ばれる顕官たちを集め、多くの人々とともに彼らをこの地へと連れてきた。大きな家を建て、大いなる利便さと皇帝からあたえられた位とともに彼らを町に住まわせた。そうすれば、彼らが生まれ故郷の家と祖国を忘れると思ったからである。皇帝は大きな宮殿、すばらしい競馬場、交易をおこなうための屋根のついた二つの柱廊を建てた。そして、この町を「新しいローマ」と名づけた[22]。

そのあとに彼は栄えある教会を建てた。偉大なるソフィア教会、聖使徒教会、聖イリーナ教会、聖モキイ教会、大天使ミカエル教会[23]である。彼はすばらしい紫色の円柱[24]を建てた。この柱はたいへん大きく重かったので、3年かけて海路でツァリグラードまで運んだものである。海から交易広場まで運ぶのに1年かかった。皇帝はしばしば運搬の現場を訪れて、丹念に仕事をやってくれよと言って人々に多くの金をあたえた。その基礎には、キリストが祝福なさった12の籠[25]、かの十字架[26]の断片、聖なる遺骸を置いた。一枚岩から切りだした驚くべき円柱を支え、守るためである。この円柱のうえに、フリジアの太陽の町[27]からもってきた、頭から7つの光線を発す

---

[22] ビザンツの著述家たちは、コンスタンティヌスが、自ら創った町を「新しいローマ」と名づけたことを伝えている。中世ロシアにおける呼称「ツァリグラード」は、ギリシア語のバシレウサ・ポリスの借用語である。

[23] ここでは、コンスタンティノープルの有名な教会が列挙されているが、その建設年代はさまざまである。イリーナ教会は532年、聖ソフィア教会は532年から537年にかけてトラレスのアンテミオスとミレトスのイシドロスによって、木造のバジリカがあった場所に建てられた。聖使徒教会は9世紀終わりから10世紀初めに建立された。このうち、現存しているのは聖ソフィア聖堂と聖イリーナ教会のみである。

[24] ピンクの斑岩の円柱で、ローマから運ばれた。そこにはアポロンが彫琢されていたが、12世紀に十字架像に変えられた。

[25] 『ヨハネによる福音書』6章9節にもとづくもの。5つのパンと2匹の魚が5000人の群集の食べ物になり、さらに12かごのパンが余ったとされている。

[26] キリストが磔刑にかけられた十字架のこと。

[27] この名前の都市は、フェニキア、エジプトには存在するが、フリジアでは確認されない。ヘリオポリスHeliopolisと発音の近いヒエラポリスHierapolis（パムッカレPamukkale）が近在にあったため、これと混同

る神像を建てた。同様に、多くの国々、町々から、驚くべき賞賛に値するほかのさまざまな品々をもってきた。そして、町を飾りつつ、刷新、祝祭、多くの日々の壮麗なる祭典によって、大いなる名誉を確立したのである。そして、この町がツァリグラードと呼ばれるように定めた。すべての人々のあいだに、大いなる喜びがあった。

日数がたってから、皇帝は総主教、高位聖職者とともに、あらゆる聖職者階級、皇帝の元老院のすべて、多くの民衆を集めて、礼拝式をおこなって祈った。祈りによって全能ですべてのものの源泉である三位一体、父と子と聖霊と、さらにいと清らかなる神の御母に賛辞と感謝をささげた。そして、みなは町とあらゆる階層の人々を完全に聖なる神の御母とオジギトリア・イコン[28]の御手にゆだねて言った。

「そなた、完全に無謬なる女主人である神の御母よ。その本性において人間を愛する者よ。そなたの宝であるこの町をお見捨てなりませんように。母親のように、いついかなるときも導き教えながら、キリスト教徒たちを庇護し、守り、お憐れみください。あなたの尊いお名前がこの町で永遠に讃えられ、大いなるものとなりますように。」すべての人々は言った。「アーメン！」そして、皇帝に感謝し、彼の善良な理知と神への従順を讃えた。

皇帝は軍司令官たち、年の長老たち、師父たちに、聖堂と世俗の建物を建立して、町を完成させるように命じた。また、貴族、顕官、高い身分にあるあらゆる者たちに命じたところによると、もしもツァーリへの勤務において何らかの位を受けるならば、みずからの名が名誉をもって記憶されるよう、屋敷や栄えある修道院やそのほかの妙なる建物を建て、町がすばらしい被造物で満たされるようにするようにしなければならなかった。

同様に、コンスタンティヌスのあとに君臨した皇帝も帝妃も、それぞれが自分の統治時代にすばらしい事跡を残すように尽力した。ある者は、主の受難の聖遺物やいと清らかなる神の御母の衣と帯、聖人たちの遺骸、神々しいイコンを探索して収集したが、なかでもあのエデッサ[29]の、

したことも考えられる。

[28] 「導き手の聖母」の意。イコンの図像としては、左手に幼児キリストを抱え、右手でキリストを指す姿勢をとり、イコンを見る者、あるいは、はるか遠くに視線を向けている。ここで言及されたイコンは、コーラ修道院（現カーリエ博物館）に収蔵され、コンスタンティノープルが敵に包囲されるたびに持ちだされて加護の祈りが捧げられた。オスマン軍による征服後、装飾の宝石が抉り取られて奪われ、市中に引き回されたあと破壊された。ODB., pp. 2172-2173; 尚樹啓太郎『コンスタンティノープルを歩く』東海大学出版会2998 年、184 頁。

[29] エデッサは、東方オストロイニ（エウフラティス河畔）州の都市で、4 世紀から6 世紀にかけて、キリスト教の中心地であった（現在は、トルコ共和国の町ウルファ）。「人の手によらない聖画像」とは、イエス・キリストとエデッサのアブガル王とのあいだの交流を記した、以下の有名な伝説による。

重い病に苦しんだエデッサ王アブガルは、キリストの訪問によって治癒されることを望むが、キリストは自らは赴かず、弟子に自分の顔を刻印した布をもたせて送った。イエスが顔を洗い、自らの顔を布に押し当てたとき、その顔が布に現われたという奇蹟が起こった。この時の布が、正教会でいうところの「自印聖像」であり、「人の手によらない / αχειροποίητα / нерукотворная」イコンの最初のものとみなされてきた。Benz E. *Geist und Leben der Oestkirche*. Wilhelm Fink Verlag. Muenchen.1971, S. 10. 自印聖像は、エデッサで数々の奇跡を起こ

神であり人であるキリストの、人の手にはならぬ聖像画をもわが物としたのである。ある者は町を増築拡大し、大きな建物を建てた。また、ある者は、ユスティニアヌス帝[30]、テオドシウス大帝[31]、エウドキア皇妃[32]やそのほかの者たちと同じように、ふたたび聖なる修道院や神の家々を建設した。かくのごとくして、町はすばらしい驚くべきもので満ち溢れることとなった。霊験あらたかなるクレタのアンドレアス[33]はこの町のことを驚き、次のように言った。「まことにこの町は言葉をも、理解をもはるかに超えている。」

こうしたことに加えて、無謬の神の御母、われらが神、キリストの御母が、あらゆる時代に皇帝が君臨するこの町を守りたまい、庇護したまい、災難から救いたまい、取り返しのつかない不幸から遠ざけたもうたのである。この町は、至聖なる神の御母のかくのごとき偉大にしていわく言いがたい慈悲と恩恵を忝うしたが、それはこの世界をすべてあわせてもそれにはおよばぬほどであった。

したとされる。

キリストが布で顔をぬぐうことで自然と現われた、この聖顔布（マンディリオン）についての風聞は、東方正教会世界ではよく知られており、このため、ビザンツ皇帝ロマノス1世（在位920－944）は、943年、この聖顔布を手に入れるべく、ムスリムの支配下にあったエデッサに兵を送り、捕虜200人と銀貨1万2千枚でこの聖顔布の入手に成功する。944年8月15日、盛大な祝賀がおこなわれるなか、この聖顔布はコンスタンティノープルに到着した。聖骸布到着が大評判になったことは複数のギリシア語史料から知られている。のちにロマノス帝の婿にあたるコンスタンティノス7世ポルフィロゲネトス帝（在位913－959）が、コンスタンティノープルへの譲渡にいたる聖顔布にまつわる逸話を一著作にまとめた。この記述が、11世紀のヨアニス・スキリヅィスや12世紀のヨアニス・ゾラナスなど後代の歴史家によって引用された。ODB., pp. 12-13, 676, 1282-1283.

30　東ローマ皇帝（在位527-565年）。ローマ帝国の復興を政治目標に掲げ、軍事遠征により北アフリカ、イタリアを回復し、聖ソフィア大聖堂を建築し、ローマ法大全を編纂させた。史上もっとも有名な東ローマ皇帝。

31　統一ローマ帝国の事実上最後の皇帝（在位379-395年）。380年の勅令によって、帝国内でキリスト教以外の宗教を奉ずることが禁じられた。コンスタンティノープル市街整備にも功績があり、競馬場にエジプトのカルナック神殿から運ばせたトトメス3世のオベリスクを設置した。オベリスクを載せるために造営した基壇には、競馬を観戦するテオドシウス帝とその家族、降伏した異民族君主を引見する皇帝の姿が刻まれている（オベリスクは現存）。

32　ローマ帝国東帝（在位408-450年）テオドシウス2世の妻。アテネの多神教徒の家庭に生まれ、コンスタンティノープルに移住してキリスト教に改宗し、テオドシウス2世と結婚した。反カルケドン派、単性論の支持者として活動したが、のちにカルケドン派とも和解した。テオドシウス2世は、2度にわたるエフェソスにおける教会会議（431年、449年）で正統派信仰への統合を画した。312年以降の勅令を集成編纂したテオドシウス法典を編纂した。また、413年にコンスタンティノープル市城の拡大と新たな三重の城壁、テオドシウス城壁の建設をおこない、都市計画を完成させた。

ここに名前を挙げられたユスティニアヌス1世、テオドシウス1世、エウドキア皇妃の在世中に、コンスタンティノープルはローマ帝国の首都としての威容を整えた。

33　「大カノン」の作者として知られる、7世紀から8世紀にかけてのビザンツの教会詩人。14歳のとき、エルサレム近くの聖サヴァ修道院の修道士となり、その後、ユスティニアヌス2世（在位685-695、705-711年）の時代にクレタ島のゴルティナの主教となった。

しかし、私たちの本質は邪悪で冷酷だったので、私たちは、正気を失った者たちのように、神の慈悲と寛大さに背を向け、悪行と無法にふけり、そのことで神といと清らかなるその母御を怒らせ、みずからの誉れと栄えを失った。それは次のように書かれているとおりであった。「悪行と無法は強者の玉座を打ち砕く[34]。」また、次のようにも書かれている。「神は、彼らの心の高慢な考えを打ち砕き、強者を玉座から引きずりおろす[35]。」

同じように、この皇帝の君臨する町は、はかり知れない罪と無法のために、いと清き神の御母のこれほどの寛大さと恩寵を失って、幾万とない災難とありとあらゆる不幸に多年苦しむことになったのである。

同様に今日、最後の時代に、私たちの罪のために、あるときは不信心者たちの攻撃のために、あるときはたび重なる飢餓と病のために、あるときは内輪の争いのために、強き者は力を失い、ふつうの人々は乞食となり、この町の威勢は地に落ちて、ひどく弱々しくなって、「ブドウ畑の仮小屋のように、菜園の納屋のようになった[36]」のであった。

これらすべてのことを見て、そのころトルコ人に君臨していた、神を信じないメフメト[37]、ムラト[38]の子が、コンスタンティノス皇帝[39]と和平を結び、話し合いがついていたのにもかかわら

---

[34] 引用不明。

[35] 『ルカによる福音書』1章51-52節。「主はその腕を振るい、思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろし…」

[36] 『イザヤ書』1章8節。「そして、娘シオンが残った。包囲された町として。ぶどう畑の仮小屋のように、きゅうり畑の見張り小屋のように。」

[37] オスマン朝第7代スルタン、メフメト2世（在位1451-81年）。コンスタンティノープル征服後、「ファーティヒ（征服者）」の称号を得た。その治世下にバルカン半島のほぼ全土、エーゲ海地域、小アジアの大部分、クリミア半島を併合し、ワラキア、クリム・ハーン国を保護下に置いた。内政面では、コンスタンティノープルに遷都し、トプカプ宮殿、ファダティフ・モスク、カパルチャルシュ（大バザール）を造営して政治・経済・宗教の中心地として整備した。また、側近にデヴシルメ出身者を数多く登用してスルタン専制の基盤を確立した。メフメト2世は、疲れを知らないエネルギー、はかりしれない功名心、狡猾さ、洗練された残酷さ、卓抜した知性と輝かしい教養によって、抜きんでた存在であった。F. Babinger, *Mehmed the Conqueror and his time, transl. R. Manheim*, Princeton 1978; H. Inalcik, *The Ottoman Empire. The Classical Age*, 1300-1600, New York 1973, pp. 23-30, 90,95,97.

[38] オスマン朝第6代スルタン、ムラト2世（在位1421-51年）。1422年にコンスタンティノープル包囲を試みたが成功せず、以後はビザンツ帝国との友好政策を維持した。アンカラの会戦（1488）以降に失われていた領土の回収につとめ、イピロス地域のほとんどを併合してアドリア海に勢力を拡大した。Inalcik, *The Ottoman Empire*, pp. 17-22.

[39] ビザンツ帝国最後の皇帝コンスタンティヌス11世パレオロゴス（在位1449-1453年）。マヌイル2世とセルビアの皇女エレーナ・ドラガシュのあいだの第4子で、モレアス専制公として、アカイア侯国併合、ギリシア本土への勢力拡大などの功績をあげた。皇帝に即位したあとは、行政改革や苦境にあった財政の立て直しなどを試みたが、ほどなくオスマンとの戦争に突入した。生前から国民の人気が高く、その死は彼を事実上の聖人へと押しあげ、さまざまな伝説、逸話を残すことになった。

ず、突如として陸海の多くの軍勢を集め、何の前触れもなく進撃し、たくさんの軍勢で町を包囲した。皇帝と居合わせた重臣たちも、町のあらゆる人々も、この事態にどう対処したらよいかわからなかった。世俗の人々の評議会もおらず、皇帝の兄弟たち[40]もいなかったからである。そこで、彼らは起ったことを理解し、和平を交渉するために、スルタン、メフメトに使者たちを送った。信仰がなく、狡猾なメフメトは使者たちを送り返し、大砲と銃で城砦を砲撃するように、ほかの者たちには攻城用に工夫を凝らした兵器を配備し、城砦への攻撃を準備するように命じた。町の城壁内に立てこもっていた人々、ギリシア人とフランク人[41]たちは、城砦を出てトルコ人たちと一戦を交え、攻城用の兵器を配置につかせないように努力した。しかしながら、敵は多勢で強力だったため、なんらの痛痒をあたええなかった。なぜなら、一人が千を相手にし、二人が万にあたる[42]という状況だった からである。

これを見て、皇帝は貴族、顕官たちに、兵を分け、城砦の胸壁、塔、門にあたらせた。ふつうの人々もすべて同様に配置した。一人ひとりが状況を把握し、自分の持ち場を守るために、戦闘用の鐘を城壁のあらゆる場所に設置した。城壁から出撃することなく、トルコ人たちを城壁から追い落とすために、戦闘に必要なものはすべて備えつけた。同様に攻撃がおこなわれそうなところに城壁防備のための大砲と銃を配備した。

皇帝自身は、総主教、聖職者、聖職者評議会の全員、大勢の女たち、子供たちとともに、神の教会を巡回し、祈りと懇願をおこない、涙を流し、号泣しながら、こう言った。

「主よ、主よ、恐ろしい本性よ、理解しがたい力よ、私はそのお力を見ました。かつて山を揺り動かし、被造物は震えました。太陽と月は、その輝きにおいて恐れをなして光を失い、空の星々は落ちました。呪われた私たちは、こうしたすべてのことをなんとも思わず、罪を犯し、無法を

40　モレアス専制公であった皇帝の弟デメトリオス（在位1449-60）とトマス（1430-460）を指す。コンスタンティノス11 世帝の皇帝即位（1449 年）とともに、デメトリオスはミストラスの、トマスはパトラの共同統治者となった。

モレアスはペロポンネソス半島の別名である。この地は、中世以降、桑の産地、絹織物産業の中心地として発達し、そのため「桑の葉」を意味する男性名詞「モレアス」の名前で呼ばれるようになった。ODB., p. 1409.「モレアス専制公領」は後代の便宜的な名称であり、このような政治国が帝国内に存在していたわけではない。14 世紀以降、帝国領土の縮小と点在化のなかで、広範な自律的裁量による行政府の運営、軍事作戦遂行をおこなうことが常態化し、重要な拠点には皇族が専制公despotis として派遣され、事実上終身の行政官として統治にあたった。「モレアス専制公」はその一つである。平野智洋「後期ビザンツ地方行政と専制公、尊厳公、副帝称号」『オリエント』44-1、2001 年、58-75 頁。

41　中世ロシア世界では、ビザンツ世界にならって、イタリア人を「フランク人」と呼んでいた。

42　「多勢に無勢、衆寡敵せず」をあらわす伝統的な表現が適切に使われている。

同時代のビザンツの著述家ゲオルギオス・スフランヅィス（1401-1478 ころ）によれば、コンスタンティノープルを包囲したオスマン軍は、大小の艦船400 隻、陸上からの兵員20 万人であり、ビザンツ側は4773 人と外国人の傭兵200 人であった。ゲオルギオス・スフランヅィス『回顧録（小年代記）』（３）—— 翻訳、註釈と解説、第29 章から第35 章まで（1448-1453 年）、79 頁。

おこなってきました。

主よ、あなたの御前で、私たちは何万回も神であるあなたを怒らせ、あなたが神であることを蹂躙し、あなたからの偉大な賜物を忘れ、あなたのご命令を踏みにじり、あたかも狂人のように、私たちはあなたの憐れみと寛大さに背を向け、邪悪な行いと無法へと向かい、その結果、私たちはあなたから遠ざかりました。私たちとあなたの聖なる町に襲いかかったこれらすべてのことは、私たちの罪のゆえに正当な真実の裁きとしてあなたがおこなったことです。何か申し開きをすべく、私たちが口を開く余地はありません。

しかし、すべての者から讃えられるいと妙なる神よ、私たちはそなたによって造られた被造物であり、あなたの御手の御業でありますから、私たちを永遠に敵の手に、あなたに仇なす者たちの手にわたさないでください。あなたの宝を滅ぼさないでください。私たちからあなたのお憐れみを遠ざけないでください。今このときに、私たちをお許しください。なぜなら、私たちはあなたに向かい、おなたのお慈悲をもとめて悔悟しているのですから。主よ、あなた自らがおっしゃったではありませんか。『私が来たのは、正しい人を招くためではなく、罪びとを招くためである[43]。彼らを改悛させ、生きさせるためである』と。ああ、主よ、天の皇帝よ、お鎮まりください。

あなたの御母さま、聖なる総主教たち、かつてこの町で神であるあなたのお気に召された皇帝たちのために、お鎮まりください。」

これらすべてのことやほかのたくさんのことを言い募りながら、毎日、無謬の神の御母にたいして心の奥底から、呻きと号泣によって人々は祈りつづけた。

皇帝は頻繁に町中を巡回しながら、将軍たちと兵士たち、また同様に、すべての人々を激励し、希望を失わないように、敵にたいする攻撃の手を緩めないように、全能なる主に望みをかけるようにと説いた。なぜなら、この全能なる主こそ、私たちの助け手であり、庇護者であるからである。そして、皇帝はふたたび祈りに身を捧げた。

トルコ人たちは昼も夜も眠る暇なくいたるところで、兵を交代ごうたいさせながら、城砦にこもる人たちを疲労困憊させようと、一刻も彼らを休ませることなく戦った。というのも、城砦にこもる人たちは攻撃に心構えができていたからである。13日目にいたるまで、戦闘はかくのごとくおこなわれた。14日目にトルコ人たちはみずからの神を知らぬ祈りを叫びながら、ズルナー[44]やヴァルガン[45]を吹き鳴らし、ナクルィ[46]を打ちひびかせ、たくさんの大砲や銃器を転がしてきて町を砲撃しはじめた。同様に、何万という小銃や弓からも射撃した。

城砦に立てこもった者たちは雨あれらと射撃されるので、城壁の上に立つことができなかったが、物陰に身をひそめ、突撃を待っていた。また、別の者たちは大砲や銃から力のおよぶかぎり

---

43 『マタイによる福音書』9章13節;『マルコによる福音書』2章17節;『ルカによる福音書』5章32節。

44 カフカースや中央アジアのオーボエに似た木管楽器。

45 口琴。シベリア、中央アジア、東南アジアの諸民族が用いる、口に含んで鳴らす楽器。

46 おもにカフカース地方の太鼓。

砲撃し、多くのトルコ人たちを殺した。総主教と主教たちと聖職者階級のすべての人々は、たえまなく神の憐れみと町の救済を祈っていた。トルコ人たちが攻撃をはじめていたとき、彼らは城壁からあらゆる人々を追い落とすと、ただちに全軍勢が叫びだし、雄たけびと金切声をあげながらいっせいにあらゆる方角から町を攻めた。手にたいまつをもつ者もいれば、梯子を携える者もいれば、城壁を破壊する用具をかつぐ者もいれば、そのほか町を征服するための、多くの細工をほどこした道具をもった者たちもいた。城砦に立てこもる人々は、彼らにたいして雄たけびと金切声をあげ、彼らとはげしく戦った。

皇帝は馬で町を巡回し、味方の人々を督戦し、彼らに神に望みを置くように言い、町中の鐘を鳴らし、人々を集めるように命じた。トルコ人たちはふたたび大きな鐘の音を聞き、何万というズルナーとラッパを吹き鳴らし、ティンパン[47]を打ち響かせた。そして、激しく恐ろしい斬り合いが起こった。大砲や銃の砲声、鐘の音、敵味方双方の人々の雄たけびと金切声、武器のうなる音が合わさって、両者の銃砲から稲妻が輝きわたったかのようだった。城砦の人々、女たち、子供たちの泣き声と号泣のために、天と地が一体となり、天と地両方によって揺さぶられ、お互いに言っている言葉がわからないほどであった。人々の雄たけび、金切り声、泣き声、号泣、大砲の砲声、鐘の音が一つの音となって、まるで大きな雷鳴のごとくであった。それからさらに、双方のたくさんの大砲や銃の火と射撃のために、煙が立ち込め、町と軍勢を覆っていて、互いが見えず射撃しあい、硝煙のために多くの者たちが死んだ。

あらゆる城壁で手をつかんで斬り合いがおこなわれてきたが、夜が両者を引き分けた。トルコ人たちは自らの陣営に引き返し、自らの死者を省みなかった。城砦の人々はトルコ人たちのために死んだ者のように倒れており、城壁に見張りだけを残した。翌日、皇帝は遺骸を集めるように命令したが、集める人々を見つけることができなかった。すべての人々は戦闘に疲れて眠りこんでいたからである。すると、皇帝は総主教のもとに人を遣り、主教や輔祭に命じて死者を集め、彼らを埋葬するように命じた。まもなく大勢の主教や輔祭たちがあつまって、死者たちの遺骸を取りあげて、彼らを葬った。ギリシア人の数は1740名、フランク人、アルメニア人の数は700名であった。

皇帝は貴族たちを引き連れて町の城壁を回り、負傷者たちの様子を見て歩こうとした。なぜなら、彼らの声は絶え、物音ひとつ聞こえなかったからである。みなは眠っていたのである。そして、皇帝は堀には死体が埋まっており、水のなかや岸辺に打ち上げられた遺骸もたくさんあるのを見た。殺された者たちをすべて数えると、1万8千人におよび、多くの攻城用の器具があったが、皇帝たちはそれらを燃やすように命じた。このようにしてから、皇帝は総主教や主教たち、主だった聖職者たちはそろって聖なる大きな教会にゆき、万能の神といと清らかなる神の御母に祈りと感謝をささげたのである。いま神を知らぬ者たちが退却し、自らの軍勢によってどれだけの敵兵が殺されたのかを見たからである。

---

[47] ティンパニーに似た楽器。

スルタン、メフメトは信仰のない者であり、このようには考えなかった。翌日、自らの軍勢の死者の様子を見てくるように使いを出し、たくさんの死者があることを知ると、ただちにたくさんの兵を送って自らの軍の屍骸をとってきた。われらが皇帝は、彼らにたいしていかなる戦も仕掛けず、堀や海をきれいにさせるように命じた。このように彼らは、戦いに妨げられることなく自軍の兵の屍骸を収容し、それを燃やした。神を知らぬトルコ人たちは、何の成果も上げず、自らの兵に犠牲が多かったことを見てとると、ただちに多くの大砲や銃を攻城のために増設し、城壁を破壊する兵器を準備するように親方たちに命じた。7日目にこの信仰なき者は、兵を城壁に進軍させ、まえと同じように眠る暇もあたえず戦闘するように命じた。

コンスタンティノス帝は海と陸づたいに、モレアスの兄弟たち、ヴェネツィア、そして、ジェノアに使者を送り、援助を求めた。兄弟たちは出陣することができなかった。というのは、自分たちのあいだでの内争がはげしく、アルバニア人との戦闘もかかえていたからである[48]。フランク人たちは援助することを望まず、内心ひそかにこう考えていた。「そのまま放っておこう。トルコ人たちが取るだろう。トルコ人たちから、私たちがツァリグラードを奪えばよい。」

このようなわけで、どこからも援軍が来なかったのである。ただ一人ジェノア人の公でジュスティニアーニ[49]という名の者が2隻の船、2隻の軍装ガレー船に600人の勇敢な兵たちを連れて皇帝を助けるためにやってきた。この男はトルコ海軍のあらゆる軍勢の囲みを破ってツァリグラードの城壁にやってきたのである。彼を見ると、皇帝は非常に喜び、彼に大いなる名誉を授けた。なぜなら、以前から皇帝は彼のことを知っていたからである。そして、ジュスティニアーニは、城壁のなかでトルコ人の攻撃が最も激しい場所を皇帝から聞き出した。皇帝は任務の遂行のために彼に自らの兵2千をあたえたが、彼らはトルコ人とかくも果敢かつ勇猛に戦ったので、すべてのトルコ人たちはこの場所から退却し、ふたたびその場所に攻めてくることはなかった。

ジュスティニアーニはこの場所の守りについたばかりではなく、都市の城壁をまわり、兵たちを勇気づけ、希望を失わないように、神への望みを揺るぎなくもちつづけるように、事にあたる

---

[48] デメトリオスとトマスは1450年前後に境界線をめぐって対立したが、オスマン、ヴェネツィアの調停で和解した。*Laonici Chalcocondylae historiarum libri decem*, ed. I. Bekker, Bonn 1843(*CSHB*), p. 378. アルバニア人の反乱が発生するのは1453年9月のことであり、コンスタンティノープル包囲戦当時のことではなかった。*Giorgio Sfranze Cronaca(Georgii Sphrantzae Chronicon)*, a cura di R. Maisano, Roma 1990(*CFHB* 29), p. 142. 平野智洋による邦訳がある。「ゲオルギオス・スフランヅィス『回顧録（小年代記）』翻訳、註釈と解説」(1)、(2-1)、(2-2)、(3)、『東海史学』45-47号。

[49] ジェノア人、ジャヴァンニ・ジュスティニアーニ・ロンゴのこと。ジェノアの傭兵隊の首領で、コンスタンティノス11世より「軍務長官πρωτοστράτωρ（プロトストラトル）」に任命されて（つまり、「大いなる名誉」を授けられて）実戦指揮をとった。皇帝はさらにオスマン軍撃退の暁には北エーゲ海のリムノス島を下賜する約束もしていた。Ducas, *Historia Turco-Bizantina(1341-1462)*, ed. V. Grecu, Bucresti 1958, p. 331. 都市の攻防におけるその役割は、さまざまな史料によって異なる評価をされている。ときにはその消極性が槍玉に挙げられ、職務にたいする裏切りを指摘されることもある。ロシア人の作者は、こうした史料と異なり、ジュスティニアーニの勇気を強調し、ことに彼が負傷が重かったために戦場を離れるさいに彼のことを弁護している。

のに油断なきように教え諭した。兵たちは全知全霊をかけて、信仰のない者たちと戦おうと心に決めた。「主なる神はわれらをお助けたまう」と。このような多くの言葉で人々を教え導き、彼らを諭した。なぜなら、彼は軍事に精通していたからである。すべての人々がこの男のことを好み、あらゆる面でこの男に従った。

前述したように、トルコ人たちはあらゆる場所で、交代ごうたいで眠らせる暇もなく戦った。なぜなら、彼らは多くの軍勢がいたからである。最初の攻撃から30日目に、ふたたび大砲と銃器とそのほかの攻城具を転がしてきて、全軍合わせてその数がどのくらいになるのかわからなかった。彼らのもとには、その場所で鋳造された2門の巨大な大砲があった。一つは砲弾が膝のところまであるほどの大きさであり、もう一つは腰の高さまであった[50]。敵たちはあらゆる方角から町を砲撃しはじめた[51]。ジュスティニアーニのいた場所に巨大な臼砲が向けられた。なぜなら、その場所は城壁が低く、脆かったからである。敵方はこの場所に砲撃を集中して壁が揺れはじめた。別の場所の砲撃によって壁が上から5サージェン[52]くらい崩れた。また別の場所は砲撃する時間がなかった。夜がやってきたからである。ジュスティニアーニは夜にこの場所をふさぎ、もうひとつは木製の壁をたて内側から盛り土をして補強した。

しかし、このような強力な軍隊にたいして何ができたであろうか。翌日になるとふたたび、同じ場所をたくさんの大砲と銃器が砲撃しはじめた。城壁が崩れかけると、示しあわせて敵方は大きな大砲からの砲撃を集中し、この城壁を叩き潰そうと狙った。そして、神のご命令によってひとつの砲弾が壁より高く跳んだが、壊したのは7つの堡塁だけだった。一つの砲弾は教会を囲む壁にぶちあたって、壁はこっぱみじんとなった。近くでこれを見ていた人々は、神に感謝をささげた。すでに真昼になるころ、敵方はふたたび臼砲を引っ張りだした。ジュスティニアーニは自らの大砲を引き出して、この臼砲に向かって砲撃し、その薬室を吹き飛ばした。これを見た信仰のないメフメトは激怒し、大きな声で「ヤグマ、ヤグマ」と叫びだした。つまり、「略奪！略奪！」ということである。メフメトが叫びだすやいなや、すべての軍勢は総力をあげて、地上から、海

---

[50] オスマン側の大砲は、ビザンツの大砲よりもずっと強力だった。コンスタンティノープル市内で使用されていた小型の大砲は、トルコ軍の大型の大砲と比べものにならなかった。同時代のギリシア人の言葉を借りれば、「大砲がすべてを決した」のである。オストロゴルスキー『ビザンツ帝国史』725頁。

ギリシア側からトルコ側に勤務替えをしたハンガリー人ウルバンが、石の弾丸を打ち出す二つの巨大な臼砲を鋳造した。ドゥカスはその二つの大砲がコンスタンティノープルの城壁に運びこまれた様子を次のように記している。「30の繋ぎ具が懸けられ、60頭の雄牛がこの大砲を引っ張った。… この臼砲の両側にはそれぞれ200人の人間がいて引っ張ったり、バランスをとったりしていた。」ラオニコス・カルココンデュレスが書くところによると、この臼砲から打ち出された砲弾は飛行のさい、すさまじいうなりを上げ、着弾すると400スタディオン（72キロ）四方にわたって地面が揺れた。

[51] 1453年4月22日、メフメト2世は陸を越えて大量の軍船を金角湾内に引きこむことができた。オストロゴルスキー『ビザンツ帝国史』725頁。このことにより、マルマラ海ばかりではなく、金角湾からも、すなわち「あらゆる方角から」コンスタンティノープルを砲撃することが可能となった。

[52] 1サージェンは2.134メートル。

上から、町を征服しようと、あらゆる兵器、道具を使って町を攻撃した。町に閉じこもる人々は老いも若きも城壁にのぼったが、なかでも多くの女たちが彼らに立ち向かい、はげしく戦った。総主教、主教たち、あらゆる階層の聖職者たちだけが神の教会に残り、号泣と呻きとともに神に祈りをささげていた。

ツァーリはふたたび涙を流し号泣しながら町全体を見回り、将軍[53]とすべての人々に懇願してこういった。「皆様方、兄弟たちよ、民草たちよ、貴顕たちよ、いまや、神といと清らかなるその御母と私たちのキリスト教の信仰を讃えるときが来た。勇気を出してくだされ。覚悟を決めてくだされ。困難のなかで意気消沈しないでくだされ。栄えある信仰と神の教会のために命を懸けて、希望を失わないでくだされ。もの惜しみない神が私たちをほめてくださいますように。」

皇帝はこのようなことやほかのことを叫びながら、町じゅうの鐘という鐘を鳴らすように命じた。同じようにジュスティニアーニは城壁を回りながら、人々を勇気づけ、励ました。人々はみな神の教会の鐘の音を聞くとたちまち、励まされ、勇敢になって、「今日こそ、キリストの信仰のために死のう」と口々に言い合って、前にもまして烈しくトルコ人たちと戦った。まえに書いたことだが、どんな言葉がこの不幸と受難を描き、物語ることができるだろう。なぜなら両軍の屍がわら束のように柵沿いに倒れ、累々と重なり、彼らの血は城壁のかたわらを川のように流れていたからである。

両軍の人々の号泣と叫び、町の人々のすすり泣きと啼泣、鐘の音、大砲の砲声と閃光は、都市全体を根底から変貌させるように思われた。堀は人間の屍が上のほうまで詰まっており、トルコ人たちはそれらを階段でも昇るかのように跨ぎこして戦った。死者たちが彼らにとっては町にいたる橋であり、階段であった。そして、同じように水面全部と町の周りの岸辺が死骸と流れる血でいっぱいだった。血は勢いのある奔流のようにガラタ湾[54]、すなわち、潟全体を満たし、血まみれにした。堀と低地は血まみれになっていたが、それでも烈しく容赦なく斬り合いがつづけられていた。もしも主がこの日を終わらせたまわなかったならば、すでに最後の死が町に訪れたであろう。というのも、町の人々はすべてすでに疲労困憊していたからである。

夜が来てトルコ人たちは疲れた様子で、自らの陣営に引き上げていった。町の人々は戦闘の終わったその場所で倒れこんでいた。その夜は、斬られてまだ生きている人たちの呻きと号泣以外に何も聞こえなかった。翌日、皇帝は主教と輔祭たちに屍を集め、葬るように命じ、生きている者たちは医者の手にゆだねた。集められたギリシア人、フランク人、アルメニア人、そのほかの

---

[53] «Стратиг /στρατηγός» の訳語。ストラテゴスは古代では、陸軍・海軍の指揮官を意味していたが、ビザンツ帝国ではテマ（軍管区）長官を指した。テマは軍人が行政権をもつ、中期ビザンツ帝国にはじまる軍政組織であるが、ビザンツ帝国がオスマン帝国に圧迫されにつれて形骸化、名目化していた。最終的には、「将軍」というほどの意味合いしかもたなくなった。「テマ」『平凡社大百科事典』; 井上浩一『ビザンツ帝国』岩波書店、303-305頁。

[54] ガラタは現在のイスタンブールのカラキョイ地区。聖ソフィア聖堂があるコンスタンティノープル中心部から見ると、金角湾を隔てて対岸にあたり、ジェノアの居住地区と68メートルにおよぶキリスト塔が設けられていた。

異邦人たちは5千7百人にのぼった。ジュスティニアーニとすべての貴顕たちが城壁にゆき、城壁の周辺を見て回り、不信心者たちの屍を数えてみたところ、3万5千人となったことを皇帝と総主教に奏上した。

皇帝は、味方の軍勢が倒れたのを見て啼泣と号泣をやめず、どこからも何の助けも得られないこと、敵が不退転の決意で臨んでいることを悟った。総主教とすべての合唱隊長、元老院は皇帝を取り囲み、彼を慰めながら、仁慈かぎりない神に祈りと感謝をささげるために大教会[55]に行った。多くの高貴な身分の女性や子供たちが皇后についていった。なぜなら、ほかの人々はみな、はかり知れぬほど深くいたいたしい困憊のためにまだ眠りについていたからである。そして、総主教は鐘を鳴らして町にいる全員、戦いに行っていない者たち、女たち、子供たちを呼び集め、自らの教区教会に行き、神と無謬の神の御母に、われらが神の母、永遠の処女マリアに祈りと感謝をささげるように教え諭した。あらゆる人々、女たちが町のいたるところに姿をあらわし、涙に暮れながら神の教会を目指し、神といと清らかなる神の御母を讃え、感謝を捧げた。かくして、この一日をすごし、夜は徹夜祷を歌ったのである。

信仰のないメフメトは、自らの味方の人々の屍を片付けようとせず、それらを投石器で町に投げ捨てた。屍が腐敗し、町じゅうに悪臭を放つようにである。敵勢のなかのある人々は町のことをよく知っており、町の巨大さと広大さを話して聞かせ、悪臭が何の影響もあたえないとスルタンに教えた。すると、すぐさま大勢の軍勢とともに来襲し、屍をもっていって燃やしてしまった。堀や水面に残っていた血は腐り、ものすごい悪臭を放っていたが、風に運ばれて消え、町にはそれ以上害をおよぼさなかった。事態は以上のようであったが、神を知らぬスルタンは畏れることなく、9日目にはふたたびあらゆる軍勢にたいして町を攻撃するよう、連日戦闘をおこなうように命じ、あの大きな大砲をまえにもまして強力に鋳造しなおすことを命じた。

これを知った貴顕たちとジュスティニアーニは総主教と協議し、次のように言って皇帝を説得しはじめた。「皇帝よ、私たちの見るところ、この信仰なき者は自らの企みをあきらめようとせず、それ以上に大きなことを企てようとしています。どこからも援助を期待できない私たちに何ができるというのでしょうか。そこで、皇帝陛下、陛下は町を逃れ、適当な場所に脱出するがよろしくはないでしょうか。私たちは、陛下の民と陛下のご兄弟たちが助けに来てくれると聞いております。怖がっていたアルバニア人たちも彼らのもとに参集するでしょう。そうすれば、神を知らぬ彼奴も怖れをなして町から撤退するのではないでしょうか。」

こういうことやほかの多くのことを皇帝に申し述べたあとで、ジュスティニアーニの船とガレー船を皇帝に差し出した。皇帝は長いあいだ黙っていたが、涙を噴き出させてこう言った。「そなたたちの助言を誉めてとらせる。また、感謝する。余は、これらすべてのことが余のためを思ってのことであると知っている。なぜなら、そのような選択もあるかと思うからである。とはいいながら、どうして余がそのようなことができようか。余が、聖職者衆、神の教会、皇帝の位、す

[55] 聖ソフィア聖堂のことであろう。

べての臣民たちをあとにして退去することができようか。全世界が余についてどう言うだろうか。そなたたちにお願いする。どうか余にそれを言ってほしい。余の臣下の者たちよ、それはできない。余はここでそなたたちと死ぬるであろう。」そして、その場に倒れ、臣下たちに頭を下げながら、ひどく泣いた。総主教とそこにいたすべての者たちははげしく泣き出し、前言を撤回した。人々のあいだで、これ以上、うわさが広がらないようにするためである。そして、ふたたびモレアスとほかの島々とフランク人たちに援助を求める使者を送った。

町の人々は、昼はトルコ人たちと戦ったが、夜は堀の下に降りて堀の斜面を平野のほうへ坑道を掘り、火薬を仕掛けた器を埋めた。また、樹脂と熱い硫黄と麻と火薬で満たされた容器を壁ぎわにたくさん準備した。25 日がすぎたが、このように毎日戦いがつづいており、ふたたび神を知らぬスルタンはあの巨大な臼砲を転がしてきた。臼砲は鉄の箍（たが）で締められていたが、それは堅固にすえつけるためであった。そして、それから砲弾を発射しようとしたとたん、たちまちばらばらに砕け散ってしまった。神を知らぬあの男は侮辱を受けたかのように考えて、すぐさま堡籃（ほうらん）を全力で町のほうに転がしていくことを命じた。そして、堀のあらゆる岸沿いに堡籃を据えつけると、堀を木材や粗朶や土で埋め、堡籃をさらに城壁に近づけ、城壁に立てかけ、たくさんの場所で壁のしたに穴を掘り、城壁を破壊しようとした。

そして、たくさんの人々が堀を埋めようと突撃してくるとすぐに、町の人々は、堀の内側に埋めてあった火薬の入った器に火をつけた。すると、突然大きな雷鳴がしたかのごとく地面が轟音をたて、激しい嵐のように堡籃と人々をともに雲まで吹きあげた。堡籃のはじける音、割れる音、人々の号泣、呻き声が恐ろしげに聞こえてきた。敵味方は逃げた。町の人々は城壁から町へ、トルコ人たちは町から遠くに逃げた。はるか空高くから、人々と材木が落ちてきた。ある者は町のなかへ、ある者は兵士たちのうえに落ち、堀はトルコ人たちで埋まった。町の人々はふたたび城壁のうえに昇り、堀にたくさんのトルコ兵たちがいるのを見ると、ただちに樹脂の入った樽に火をつけ、彼らに向けてぶちまけた。すると、すべての者たちが焼け死んだ。

そして、このように神のご叡慮によって、この日、町は神を知らぬトルコ人たちの手から救われた。底意地の悪いメフメトは自らの多くの兵を率いて、遠くから起こった出来事を見て、何をすべきかを考えはじめた。同様に、兵士たちはすっかりおびえて町から退却してきた。ギリシア人たちは町から出て堀のなかで、まだ生きていたトルコ人たちを殺していたが、屍は多くの山に積みあげて残った堡籃とともに火をつけた。

皇帝と総主教、聖なる合唱隊はもはや戦闘は終わりかと期待して、あらゆる教会で祈り、神に感謝を捧げていた。同様に、悪い信仰をいだくメフメトは何日も何日も評議を重ねていたが、退却することに決めた。なぜなら、海の道が通じ、いまやあらゆる方角から町を救援することが期待できたからである。

しかし、私たちの無法は私たちの頭よりも高くなり、私たちの罪は私たちの心を押しつぶしたので、私たちは神の教えに耳を傾けることも、神の道を歩むこともできなくなった。神の怒りから身を隠す場所がどこにあろうか。皇帝と総主教とすべての人々は町のなかで邪な相談をしてこ

う言った。「かの邪悪な信仰をいだく男は、もう何日も戦を仕掛けてこないが、ふたたび戦いの準備をするだろう。私たちは彼にたいして和平を申し込もう。」そして、このとおりのことをしたのである。

狡猾なメフメトはこれを聞き、心のなかで欣喜雀躍し、何か不都合なことが町に起こったのだと期待して、退却することを思いとどまり、和平の話し合いをはじめた。そして、使者たちにはこう答えた。「皇帝がこのようにめでたき評議を提議し、和平を求めるならば、余はそのようにもしよう。だが、皇帝も総主教もそれを望むすべての人々も町から出てモレアスに行かなくてはならない。空になった町を、余に無傷のまま引き渡さなくてはならない。余は恒久和平を締結し、モレアスにもその島嶼にもいかなる姦計をもってしても兵を進めることは永遠にないであろう。町から出ていきたくない者たちは、余の名において危害を加えられることもなく、悲しむこともないであろう。」

皇帝と総主教とすべての人々はこれらのことを聞いて、心の芯から呻き、腕を天に差しあげてこう言った。「われらが庇護者、主よ、高みからそなたの誉れを見そなわせたまえ。この汚らわしい不敬なる者の傲慢を打ち砕き、そなたの宝であるこの町を救いたまえ。なぜなら、われら、この町の民は聖なるそなたの民であり、そなたの牧場の羊なのですから。われらはひとつの群れとなってそなたの館で生きているのですから。牧者と導き手から離れて、われらはどこに出て行くところがあるでしょうか。いいえ、主にして皇帝たるかたよ、どこにも行くところはありません。われらはみなここで、聖なるそなたの館で、偉大なるそなたの誉れのなかで死ぬのがよいのです。」

人々はこうしたことすべてを言って、ふたたび戦闘の準備をし、メフメトへの書簡について後悔した。なぜなら、この書簡によってメフメトはこうした態度をとったからである。

三日が過ぎると、この呪われたトルコ人に人々は、あの大きな大砲の鋳造が首尾よく終わったと言った。このようなわけで、もう一度臼砲を試してみることになった。メフメトはふたたび全軍に向けて町に進軍し、来る日も来る日も戦闘をするように命じた。これは、コンスタンティヌス大帝、レオ賢帝[56]、パタラのメトディオス[57]によってこの町について預言されていたすべてのことが実現することを、神が私たちの罪のゆえにお許しになったということであった。

---

[56] マケドニア朝第2代皇帝レオン6世のこと。在位886-911年。彼のものとされる、コンスタンティノープルが滅亡するという預言があり、ヒオス司教レオナルドによって言及されている。J. R. Melville-Jones (trans.), *The Siege of Constantinople 1453: Seven Contemporary Accounts*, Amsterdam, 1972, p. 14.

[57] 3世から4世紀にかけて活動した小アジアの都市リキア・パタラの主教で『偽パタラ主教目とディオスの黙示録』の著者とされている。しかしながら、この著は実際には7世紀に書かれたもので、シリア語、ギリシア語、ラテン語および古代教会スラヴ語の版が現存する。二部構成で、第一部がアダムからビザンツ帝国の成立までの歴史、第二部が予言の書となっており、アラブの征服とアラブ勢のビザンツ帝国による敗北が「予言」されている。おそらくはシリア語で書かれ、各国語版ができた。ギリシア世界での流布は比較的遅く14世紀以降に知られるようになった。ODB.,pp. 1355-1356.

5月6日、信仰のないメフメトは、すでに三日のあいだ多くの大砲から砲撃が集中したあの場所に砲撃することを命じた。すでに城壁が崩れかけ、多くの大砲から砲撃を受け、たくさんの石が砕け落ちていた。もう一度その場所に砲撃すると、城壁の広範な部分が崩れ落ちたが、すでに夕刻に近くなったので、トルコ人たちはたくさんの大砲からその場所に砲撃を集中させはじめた。一晩経っても、町の人々にこの場所を修繕する暇をあたえなかった。ギリシア人たちはその夜、この場所の向かい側に大きな塔を建てた。

翌日トルコ人たちはふたたび大きな大砲からこの場所から下手のほうを砲撃し、広範囲にわたって城壁を破壊した。二度も三度も砲撃をおこなった。城壁が崩落した箇所はすでに広範にわたっていたので、敵方の多くの人々はただちに叫び声をあげ、その場所に押し合いへし合いしながら殺到した。同様にギリシア人たちも町から出撃し、互いの顔を見ながら斬り合い、まるで野獣のように咆哮した。両軍の兵たちの大胆さと強靭さを見ることは恐ろしかった。

ジュスティニアーニはふたたび多くの人々を集め、雄たけびをあげながらかくも勇敢にトルコ兵に向かっていった。それゆえに、ジュスティニアーニは瞬くまに城壁から敵兵を振り落とし、堀は屍でいっぱいになった。アムラトという体の頑健なイェニチェリ[58]がギリシア人に紛れてジュスティニアーニのもとにたどり着き、勢いよくかれに斬りかかった。ギリシア人何某が壁から飛び降りて斧でアムラトの足を斬りつけ、ジュスティニアーニを死から救った。西方の県知事[59]アマル・ベイは自らの軍勢を率いてギリシア人を攻撃し、大規模な斬り合いが起こった。ある町の将軍ランガヴェイは多くの人々を率いてギリシア人の救援にかけつけ、トルコ人たちとは

---

[58] 「新軍」を意味する、オスマン帝国のスルタン直属の精鋭常備歩兵とその軍団。当初は、戦時捕虜（スルタンの財産とされた）、征服地の有力者子弟、市場からの購入によって人材を調達していたが、15世紀以降、官吏の派遣によるキリスト教徒からの徴用、デヴシルメ（「転換策」と訳される強制徴用）が加わった。コンスタンティノープル包囲戦時代、その規模は一万人程度だったとされる。

[59] «флабурар» は「旗もち」の意。トヴォローゴフは、オスマン帝国のベイレルベイ（州総督）を指すものと考えている。ベイレルベイはもともとはセルジューク朝の「ベグレルベギ」、すなわち、「ベグたちのベグ」に語源が求められる。「ベグ」はもともとチュルク系の「首長」、「支配者」の称号である。「ベグレルベギ」は、オスマン朝に受け継がれてベイ（この場合は、地方の軍司令官、県知事）のうえに立つ州総督「ベイレルベイ」となった。アナトリアとバルカンにそれぞれ1名ずつ置かれた。西の総督は、バルカン半島の「ベイレルベイ」である。

しかし、この人物がエメル・ベイ・トゥラハノウル、すなわち、長らくトゥルハラ（トリカラ）の司令官を務めたトゥラン・ベイの息子であると同定されることは、前述の解釈とは整合しない。エメル・ベイはベイレルベイ就任の経験がなく、東西のベイレルベイ職にはそれぞれ別の人物が就任していたからである。前述のように、«флабурар» はギリシア語で「旗もち／旗本」の意味があるが、「旗（軍旗）」転じて「県」を意味するトルコ語の「県（サンジャク）sanjak」、さらに「旗もち／県知事（サンジャクベイ）sanjakbeg」からの借用語であると考えられる。サンジャクベイは就任にさいし、スルタンより権威の象徴である軍旗（サンジャク）を受け取って任地に赴いたため、この名で呼ばれるようになった。Inalcik, *Ottoman Empire*, pp. 104-105, 224; H. A. R. Gibb, J. H. Kramers, E. Levi-Provencal, J. Schacht (eds.), *The Encyclopaedia of Islam, new edition*, Leiden, 1979- , VIII. S. 11-13. したがって、ここでは「西方地域Rumeli のどこかの県在職のサンジャクベイ」くらいの意味であると考えられる。

げしくに戦い、トルコ人たちをアマル・ベイのところまで押し返しさえした。エメル・ベイはランガヴェイ[60]が激しくトルコ人たちを斬るところを見ると、剣を抜き、ランガヴェイに討ちかかり、二人のあいだでは激しい斬り合いになった。ランガヴェイは石のうえに足場を固めて、剣で肩のところを両手で斬りおろし、真っ二つにした。ランガヴェイは腕の力が強かったからである。何万というトルコ人たちが怒りの叫びをあげて彼を取り囲み、斬りつけた。ギリシア人たちは全力を挙げて彼を取り戻そうとしたが、できなかった。多くの者たちが倒れた。トルコ人たちはランガヴェイをばらばらに切り刻んで、軍勢を町のなかに追いこんだ。

ギリシア人たちはランガヴェイのことで大いに啼泣し、絶望した。なぜなら、ランガヴェイは大いなる戦士であり、勇敢で、皇帝から愛されていたからである。そして、すでに夜が来て、斬り合いは止み、両軍はおのおのの陣営にもどった。けれども、トルコ人たちはふたたび崩壊した場所に大砲から砲撃をはじめ、町の人々は塔の幅を広げ、塔が崩落した箇所全体におよぶようにし、そこにひそかにたくさんの大砲を運びこんだ。塔は町の城壁の内部にあったからである。翌日、トルコ人たちは城壁の穴がまだ塞ぎきれていないのを見ると、ただちに出撃し、ギリシア人たちと戦った。ギリシア人たちは彼らと戦いながら、トルコ人のほうから退却した。一方、トルコ人たちは彼らに雄たけびをあげ、大軍をもってギリシア人たちを攻撃し、すでに圧倒したかに思われた。多くのトルコ兵たちが密集した状態になったとき、ギリシア人たちはちりぢりばらばらに逃げ、彼らに大砲が射撃され、多くのトルコ人たちが殺された。大砲の射撃がはじまると、突如町から彼らに向かって将軍パレオロゴス・セングルラ[61]が出撃した。彼とともに多くの人々がいて、はげしく敵と戦った。

東の総督ムスタファはまもなくギリシア人たちが多くの軍勢とともに攻めてきたことを見つけると、容赦なく彼らを斬りつけ、ギリシア人たちを町のなかに押し返した。敵方はすでに城壁を取り払おうとしていた。千人長テオドロスはジュスティニアーニと連携して救援に駆けつけた。はげしい斬り合いがはじまった。けれども、トルコ人たちは彼らを凌いだ。皇帝は大教会の玄関の間であらゆる貴族たち、将軍たちとともにいて、神を知らぬスルタンの意図が何であるかを評議していた、

「見よ、われらは連日トルコ人たちと斬り合いをしている。何千という我らの軍勢が戦死したことであろう。このまま戦いがつづいていけば、われら皆が殺され、われらの町は征服されるであろう。だが、選抜した、特別な任務を帯びた一隊を組織し、夜陰に乗じて適切な時間に出撃したらどうであろうか。神のお助けにすがり、われらも出撃しようではないか。ギデオンがミディア

---

[60] ビザンツ皇帝を出したこともある名門家系「ランガヴェ」家の一門のものであろう。ランガヴェ家は9世紀に皇帝ミカエル1世を輩出した家門であるが、その後零落し、パレオロゴス時代（1261-1453）の史料において、ランガヴェ家の人物は一人しか記録されておらず、その人物も13世紀後半の小アジアの公証人にすぎない。E. Trapp, *Prosopographischeslexikon der Palaiologenzeit*, Wien, 1976-1995, no. 23972.

[61] 宮廷の有力者で、1448年に皇弟セオドロス2世専制公が死去した直後、陰謀家として名前が挙がった。*Die Byzantinschen Kleinchroniken*. I. S. 99.

ン人にたいしてしばしばそうであったように[62]。あるいは、われらは神の教会のために死ぬるであろう。あるいはわれらは救いを得られるかもしれない。」

このように評議をして、多くの者たちがこの意見に傾きかけた。彼らは皇帝に大きな期待をかけた。なぜなら、皇帝の勇敢さとその力を知っていたからである。皇帝は偉丈夫で、力も巨人のように強かった。大公ルカス殿[63]と帝都総督ニコラオス[64]は長いあいだ黙っていたが、このように言った。

「私たちがトルコ人たちと戦端を開いてから、5か月が経ちましたが、わたしたちはずっと神のお慈悲をお祈りしてまいりました。もしも神のご意志があるならば、私たちはさらに5か月戦うことができましょう。もしも神のご加護がないならば、こうなりましょう。つまり、一刻のうちに私たちはみな戦死し、町は滅びましょう。」

帝国軍総司令官[65]、彼とともにいた国務長官[66]、そのほかの貴顕たちは、皇帝ができうる限りの精鋭を

---

[62] 『士師記』6-8 章。

[63] 大公（アルキ・ドゥカス、メガス・ドゥカス）の職能は艦隊司令長官であるが、陸軍の司令官や傭兵隊長にあたえられた例もある。ODB., p. 1329.

ルカス・ノタラスは、モレアスの港湾都市モネンヴァシア出身の富裕な商人家門に属し、皇帝の婿として宮廷の実力者となり、内務補佐官（メサゾン）をへて大公に就任した。豊富な資金力で艦隊、傭兵に拠金し、実際にその指揮経験もあった。商業をとおしてイタリア諸都市に人脈を持っており、親ラテン的な側面を持つ一方、ゲルギオス・スホラリオスら正教会指導層（反合同派）とのつながりも深かった。ドゥカスが伝える「私は市内にラテン人の司教冠を見るよりは、ムスリムのカフタンを見るほうがよい」という言葉（Doukas, *Historia Turco-Bizantina (1341-1462)*, ed. V. Grecu, Bucresti, 1958. p. 329）は、反ラテン主義の発露ではなかったと解釈されている。*Decline and fall of Byzantium to the Ottoman Turks by Doukas*, trans. by H.J. Magoulias, Detroit, 1975. p. 309, n. 259.

「キルКир」は「陛下」、「殿下」、「閣下」、「殿」、「氏」等をあらわす尊称キリオスの略で、外国人には固有名詞のように聞こえていたらしく、同様の事例は多数存在する。

[64] エパルフепархъ は帝都総督。首都の行政長官職で、行政・司法と警察業務を兼任。のちに職能はそのままに「帝都頭領（ケファリ）」に改称された。ODB., pp. 704-705.

ここにあらわれるニコラオス・グデリスも商人家門出身の有力者で、皇帝と縁戚関係をもっていた。コンスタンティノス11 世帝に抜擢されて、スフランヅィスとともに特設の皇帝政務補佐官職に就任し、のちに彼の娘とスフランヅィスの長子ヨアニスとの婚約もとりおこなわれた。グデリスが帝都頭領（ケファリ）であったことは、ネストルのほかにイタリア人従軍者ウベルティーノ・プスコーロが記録している。Ubertino Puscolo, *Constantinopolis, a cura di A/ Pertisi, La caduta di Constantinopoli. Le testimonianze dei contempolranel*, I-II, Milano, 1976, I. p. 206.

[65] Великий доместик は、帝国陸軍の総司令官職であるが、多くの場合、名誉職化していた。ODB.,pp. 1329-1330. 当時の在職者は、アンドロニコス・パレオロゴス・カンタクジノスである。この人物は、セルビア公妃イェリナ・ブランコヴィチーイリニ・カンダクジニの兄弟で皇帝の近親であった。D. M. Nicol. *The Byzantine Family of Kantakouzenos (Cantacuzenus) ca. 1100-1460*, Washington, 1968, no. 68, pp. 179-181; no. 71, pp. 184-188..

[66] 国務長官Логофет は、外交と公文書の発給を担当する文官の最高位。ODB., p. 1247. 当時の在職者は、ゲオルギオス・スフランヅィス。ゲオルギオス・スフランヅィスはコンスタンティノス11 世の幼ななじみで親友で

率いて町から出撃するように進言したが、それは町の包囲を解き、トルコ兵たちにあつかましくも町を攻撃することを止めさせ、遠方から町に必需品を運ばせるためでもあった。これを聞きつけると、ふたたびたくさんのキリスト教徒たちが皇帝のもとに馳せ参じた。そうして、彼らがこのことを企図していると、皇帝のもとにトルコ兵たちが城壁にのぼり、この町の軍勢を圧倒しているという知らせがはいった。皇帝も、あらゆる貴顕たちも、将軍たちも間髪をいれずに馬に乗った。将軍たちは、皇帝と貴顕たちを追い抜き、救援に駆けつけたが、たくさんの人々が逃げてくるのに出くわした。将軍たちは彼らを殴りながら戦場に引き戻した。

ジュスティニアーニはほかの将軍たちとともにすでに町のなかでトルコ人たちと戦い、ときにはトルコ人たちをまえにして敗走したり、ときには守りをかためて戻ってきては敵方と戦った。ほかのトルコ人たちがたくさんの橋を架け、騎馬で町に乗りこんできた。将軍たちはみなジュスティニアーニと連携をとり、激しくトルコ人たちを攻めたて、彼らを城壁のところまで押し返した。しかし、たくさんのトルコ人たちが、騎兵、歩兵ともども町のなかに入り、ふたたび将軍たちを押し戻し、容赦なく打ちかかり、野獣のように彼らを襲った。もしも皇帝がその場所に駆けつけなかったならば、町に最終的な破滅が訪れていただろう。

皇帝はそこに来ると、味方に大声で叫び、彼らを励ましてライオンのように雄たけびをあげ、自らの精鋭の歩兵と騎兵とともにトルコ人たちに立ち向かい、彼らと倦むことなく斬り合った。トルコ兵たちのもとに駆けつけると、ある者たちは真っ二つにし、ある者たちは半分に切り裂き、彼の剣は向かうところ敵なしであった。トルコ人たちは叫び交わしながら、勇猛な皇帝に立ちふさがり、互いに大声をあげながら、あらゆる武器をとって皇帝のところに殺到した。皇帝に無数の矢を射かけた。

しかし、よく人の口の端にのぼるように、戦いの勝利と皇帝の敗北は神の思し召しによるのである。あらゆる武器と矢は何の功も奏さずに地に落ち、皇帝のかたわらを飛びすさり、皇帝にかすり傷ひとつ負わせなかった。皇帝はひとり手に剣をもち、敵勢に斬りかかっては彼らのところに舞い戻った。敵勢は逃亡し、皇帝のために道を開けた。皇帝は彼らを壁が崩れた場所まで追いやり、その穴のまわりで犇めきあう者たちをたくさん斬り殺し、ほかの者たちを町から堀の向こうへと追い払った。かくのごとく、神のご加護により、その日、皇帝は町を救った。すでに夜となり、トルコ人たちは引き上げた。

翌日、帝都総督ニコラオスは町の人々に殺されたトルコ人たちを市壁から堀の向こうへ捨て、神を知らぬスルタンへの見せしめにするように命じた。その数は、伝えられるところによると、1万6千に上ったそうである。トルコ人たちは話し合っていたが、屍を集めて燃やした。帝都総督はまた、壊れた場所をすべて木材でふさぎ、塔を建造するように命じた。あの呪われた者たちがすでに退却したと期待されたからである。しかしながら、神を知らぬメフメトはそのような心積もりはなかった。3

あり、信頼厚い重臣であった。1452年に国務長官に就任、コンスタンティノープル陥落時に捕虜となるが身請けされ、のちに同時代の歴史書『回顧録』を記した。『回顧録』には邦訳がある。注48参照。

日後にメフメトはパシャ[67]たちと県総督[68]たちを招集し、つぎのように言った。

「不信心者たち(ギャウル)が我らに勇敢に戦うのを我らは目の当たりにしている。我らは彼らと戦って彼らを打ち負かすことができない。なぜなら、攻撃が、破壊された一つの場所に偏っているからである。狭い場所で多くの軍勢を投入することができず、小勢による戦闘になってしまう。そこで敵方は我らにたいして優勢となり、我らを凌いでいる。しかし、先般と同じように、堡籃や多くの場所で城壁に取りつくための梯子を用意し、突撃を敢行しよう。抵抗するために、町に立てこもる者たちがあらゆる場所に分散したら、ただちに破壊された場所に兵力を集中しよう。」

神がお許しになったので、呪われたスルタンはかくのごとく考え、実行に移した。スルタンは、堡籃、梯子、そのほかの攻城用に考案された道具を準備するように命じ、兵士たちには町に立てこもる者たちとふたたび戦うように命じた。このように彼らは終日戦って町に立てこもる者たちに眠る暇をあたえなかった。

5月21日、私たちの罪のゆえに町で怖ろしい徴があった。木曜から金曜にかけての深夜、町全体が突然明るくなった。見張りにあたっていた歩哨たちが駆けつけて起こったことを見たのであるが、彼らはトルコ人たちが町に火をかけたのだと思い、大声で呼び交わした。多くの人々が集まり、偉大なる神の叡智の教会[69]の丸屋根の窓から、大きな炎が吹き上げ、長いあいだ教会の上部全体を覆っているのを見た。すると、炎が一つになったかと思うと、えもいわれぬ光となって輝き、まもなく天まで昇った。この光景を見ていた人々は、ひどく泣きはじめ、「主よ、憐れみたまえ」と叫びだした。かの光は天まで達した。天の扉が開くと、光が吸い込まれ、ふたたび扉が閉じた。その翌日、人々は総主教のところに行ってこの話をした。

総主教はすべての貴族と顧問官たちを集め、皇帝のところに行き、皇帝が后妃を連れて町から出るように皇帝を説得しはじめた。皇帝は彼らの言うことを聞かなかったので、総主教は言った。「おお、皇帝陛下、こうしたことはすべてこの町について予言されていたことにほかなりません。そして、このたびは別の怖ろしい徴が起こりました。あのえもいわれぬ光は、偉大なる神の叡智の教会のなかで、位の高い聖職者や全世界の主教たちも拝謁に与かったものでした。聖なる大教会とこの町の守護のためにユスティニアヌス皇帝の治世に神が遣わされた天使[70]が、その夜、天

---

[67] オスマン帝国支配下の地域で、軍事的・宗教的指導者に用いられた称号。初期にはベイレルベイ、ワジール(大臣)そのほかの少数の高官にあたえられたが、時代が下るにつれて称号のあたえられる範囲は拡大した。現在は、トルコ人民衆の口語として、食堂のボーイや職人にたいする呼びかけの言葉としてしばしば用いられる。「パシャ」『平凡社世界大百科事典』。

[68] サンジャクベイ。サンジャク(県)を統治する軍政官。州を統治するベイレルベイと対置される。注59参照。

[69] コンスタンティノープルの聖ソフィア大聖堂のこと。

[70] ユスティニアヌス帝による聖ソフィア聖堂建設のさなかにあらわれた天使の逸話は、14世紀のロシア人巡礼者の記録に現われている。それによれば、大天使ミカエルは、現場監督をしていた若者に、建築監督を連れてきて聖堂の完成を急がせるように促した。若者がその場を離れられないというと、大天使は「皇帝のもとに行き、建築監督を連れてきて建設を急がせなさい。お前がもどってくるまで私がここの番をしていよう」と言っ

に飛び去ったのです。このことが意味するのは、神の慈愛とその寛大さが私たちから離れ、神は私たちの町を私たちの敵どもに引き渡そうとしているということです。」

このように語って総主教は奇跡を見たという男たちを皇帝に目通りさせた。皇帝は彼らの言葉を聞くと、死んだ者のように地に倒れふし、長いあいだ声も出なかったが、良い匂いのする水をかけられてわれに返った。彼は立ち上がって、総主教とすべての貴族たちに、この話は誓言をもってここだけにとどめておくように、これらのことは民衆には話さないように、なぜなら、彼らが絶望に陥って戦闘意欲を失わないようにするためであると言った。総主教はふたたびなおも食いさがって皇帝に町から退去するよう説得した。貴族たちも説得に加わった。彼らは言った。

「皇帝陛下、あなたは好きなだけの軍勢を引き連れて町から脱出してください。神のご加護があれば、ふたたびこの町を救援しに来ることができましょう。ほかの町々やすべての国々は希望をもつでしょう。そうすれば、信仰のない者たちにすぐ屈することもないでしょう。」

皇帝はこのことに与せず、彼らにこう答えた。「もしもわれらの主なる神がそのようにお望みになるのなら、私たちはどうやってその怒りから逃れることができようか。」また、皇帝はこうも言った。「余以前にもどれほどの偉大な誉れ高いツァーリが、同じように苦悩し、みずからの祖国のために死んだであろうか。余がふたたびその最後の者となってこれをしないわけに参ろうか。それはできません、わが主よ。それはできません。余はここでそなたたちとともに死ぬであろう。」そして、彼らのそばから離れた。ジュスティニアーニはふたたびほかの貴族たちとともに来て、町から出てゆくように涙と号泣とともに皇帝を大いに説得した。しかし、皇帝は彼らの言うことにはしたがわなかった。

翌日、人々が聖霊が飛び去ったことを聞くと、みなはたちまち落胆し、恐怖と戦慄が彼らを襲った。総主教は彼らを励まし、希望を失わないように教え諭した。総主教は言った。「子供たちよ、がんばってください。どうかがんばってください。私たちの救済について主なる神に望みをかけましょう。主なる神に全知全霊をもって腕をさし伸ばし、眼差しをあげましょう。主なる神は敵たちから私たちを守り、私たちに敵意を抱く一切の企みを粉砕してくださいましょう。」このようなこととほかの多くのこととともに、総主教は人々を励ました。そして、総主教は聖職者たちとすべての聖務者たちとと

た。若者からことの次第を聞いた皇帝は、若者をローマに送り、現場にもどることがないように計らった。そうすれば、この先も神の再臨までミカエルがこの都市と聖堂を守るであろうと考えたというのがその理由であった。浅野和生『イスタンブールの聖堂』中公新書、2003 年、156-157 頁。

コンスタンティノープルを守護する超自然的存在、神寵が去るという予兆については、オスマン側にも言及がある。エヴリヤ・チェレビは従軍したアク・シェムスッディーンなる戦士の一人が、「市内にはヴァドゥードという名前の聖なる人がいて、彼が生きているあいだはそれは奪われない。しかし、彼は50 日のあいだに死に、そしてそれから定められた時間に帝都は奪われるであろう」という予言を述べたという。Evliyá Efendí(Evliya Çelebi), *Narrative of travels in Europe, Asia, and Africa, in the seventeenth century*, trans. Ritter Joseph von Hammer, New York 1968 (Reprint of the 1834-46 ed. printed for the Oriental Translation Fund of Great Britain and Ireland and sold by Parbury, Allen, London). P. 33. また、包囲の20 日目、戦闘に苦しんだウレマーたちが祈りをささげたところ、アト・メイダーン（競馬場）から天空へ炎が走り、城壁を破壊したという。Evliyá, P.37.

もに神聖なるイコンを取りあげ、毎日町の城壁のまわりを巡回し、神の憐れみを乞い、涙を流しながらこう言った。

「われらの主なる神よ、不死であり悠久きわめがたいかたよ、目に見えるもの、目に見えないもののあらゆる被造物の創造者よ、不敬で性邪悪なるわれらのために天から降り、受肉し、われらのために自らの血を流された方よ、いまこのとき、支配者なる天の皇帝よ、そなたの聖なる住み処からあなたのおとなしい僕たちをご覧ください。そして、われらの罪深い祈りをお聞き届けください。そなたの耳を傾け、死の際にいるわれらの言葉をお聞きください。

われらは罪を犯しました。主よ、天のあなたのみ前で罪を犯したのです。この汚らわしい、恥ずかしい振る舞いを、この限られた人生のなかで、天と地にたいしておこないました。われらはそなたの誉れの高みを見るに値しません。そなたの恩寵に毒づき、そなたの教えを踏み破り、足蹴にし、そなたの命令にしたがわずに、神であるそなたを怒らせたからです。

支配者なる天の皇帝よ、ご自身は人間を愛する者であり、邪悪さを備えず、忍耐強く、慈愛あふれておいでになりますが、預言者をとおしてこう仰せられました。『私は悪人が死ぬのを喜ばない。むしろ、悪人がその道から立ち返って生きることを喜ぶ[71]。』また、次のように言われています。『私が来たのは、正しい人を招くためではなく、罪びとを招いて悔い改めさせるためである[72]。』

主よ、そなたは自らの手で造った被造物を破壊することをお望みになりません。ましてや、人間が死滅することも望まれていない。そなたはすべての人々が救済されること、真実の理性に到達することを願われています。同じようにわれらもそれに値するものではないが、神であるそなたの創造物であり、被造物でありますので、自らの救済について絶望してはおりません。そなたの数知れぬ恩寵を期待し、そなたにひざまづき、そなたのあとについてまいります。心の奥底からお祈り申し上げ、そなたの慈悲を求めます。慈悲をかけてください、主よ。お慈悲をかけてください。なぜなら、そなたは脈打つそなたの血によって人間たちを贖われたのですから。

敵たち、そなたが君臨される世界に歯向かう者たちの手に、われらを引き渡さないでください。今日のこの状況、われらを取り巻く邪悪と災厄からわれらをお救いください。そなたのお慈悲の大きさをもってわたしたちをお解き放ちください。そなたの奇跡をもってわれらをお救いください。そなたのお名前の誉れをおあたえください。そなたの敵たちが辱められますように。あらゆる力から恥辱を受けますように。敵たちの強さが粉々に砕け散りますように。そなたがわれらの神、主イエス・キリストであることを敵たちが思い知りますように。父なる神の誉れにおいて。」

毎日このような祈りの言葉で祈りをささげ、自らの救済に望みをかけていた。このようにすべての人々が数々の聖なる神の教会に集い、涙を流したり号泣したり手を空に差し伸べたりして、神に慈悲を願っていた。しかしながら、かつて私たちは神の恩寵と賜物といと清らかなる神の御母の恩恵にあずかることができたのに、いまとなっては私たちの罪のために、神の慈愛と寛大さを失ってしまった。

---

[71] 『エゼキエル書』33 章11 節。

[72] 『ルカによる福音書』5 章32 節。

こう言われている。「そなたたちがその手をわたしに差しのばしても、私はそなたたちから目をそらす。そなたたちが私のまえにあらわれても、私はそなたたちから顔をそむける。」また、このように言われている。「そなたたちがどれほどおこなおうと、どれほどやろうと、私の魂はそれらを憎む。」私たちは私たちの罪ゆえにこのような答えに甘んぜざるを得なくなった。私たちの祈念と祈りは神の受け入れるところとならなかった。

私たちがまえに述べたとおり、トルコ人たちは毎日町に立てこもる人たちに戦をしかけてきて、彼らを眠らせなかった。呪われたメフメトは自らの軍勢を集め、彼らに突撃の持ち場を割りふった。カラジャベイ[73]には、皇帝の宮殿[74]と木の門[75]とカリサリア[76]を、東のベギラルベイ[77]にはピギ[78]と黄金の門[79]を、西のベギラルベイ[80]にはホルスニ門[81]にあたらせた。信仰のないメフメト自身は、ちょうど真ん中、聖ロマンの門[82]と壊れた壁の真向かいに陣取った。海将バルタウグリュ[83]とザガン・パシャ[84]には、

---

[73] スルタンの近臣で、ルメリ（西方、バルカン）のベイレルベイ（軍司令官）、ダユ・カラジャ・ベイと同一人物とされる。E. Trapp, *Prosopographischeslexikon der Palaiologenzeit* (hereafter PLP), Wien, 1076-1995. no. 11093. 彼はメフメトの兄、アラーエッディーン皇子の叔父で、ルメリ軍団を率いてオスマン朝軍側から見て左翼に陣取った。*The History of Mehmed the Conqueror by Tursun Beg*, Text Puplished in Facsimile with English Translation by Halil Inalcik and Rhoads Murphey, Bibliotheca Islamica Minneapolis & Chicago 1978. p. 35. 彼はベオグラード包囲戦に参加して戦死した（1456 年）。

[74] ヴラヘルナイ宮殿、または、ポルフィロゲニトス宮殿（現テクフル・サラユ）のいずれかであるが、前者の可能性のほうが高い。いずれも市城壁北側、金角湾よりに現存する。ODB., pp. 293, 1553-1554.

[75] クシロケルコス門、現在のベルグラド門を指す。

[76] カリガリア門、現在の名称はエウリ。

[77] スルタンの近臣の称号。オスマン史家トゥルスンはアナドル（東・小アジアーアナトリア、アナトリ）のベイレルベイとしてイシャク・ベイについて言及している。PLP., no.8285; Tursun, pp. 34-35.

[78] ピギ（泉）門。この名は、「生命の泉（ゾドトス・ピギ）たるキリスト」に由来する。別名「シリンヴリア門」、現在は「シリヴリ門」。

[79] コンスタンティノープルの主門。マルマラ海側にあり、皇帝の即位、凱旋時の入場門であった。門に7 塔の要塞が付設されていた。

[80] 当時の西のベイレルベイは、前述のように、カラジャ・ベイ。

[81] ハリシオス門のこと。

[82] 聖ロマノス門のこと。現在の名称は「トプカプ（大砲門）」。上記のオスマン軍の布陣にかんする叙述は、左翼（北、金角湾寄り）にカラジャ・ベイを、右翼（南、マルマラ海寄り）にイスハキウ・パシャを配し、スルタン自らが聖ロマノス門に布陣したということは、他史料、ことにトゥルスンの記録と一致している。

[83] 海軍提督バルタオウル・スレイマン・ベイ。包囲初期の海軍提督で、ボスポラス海峡側の陸海軍の指揮に当たっていたが、4 月に金角湾に入港したジェノヴァ・ビザンツ艦隊の拿捕に失敗して解任された（後任はハムザ・ベイ）。ここでの記述は5 月25 日の事件のもので、このとき彼の姿があるのはそれ以前のことと混同されたためである。PLP., no.21580; Tursun, P.35.

[84] 金角湾の対岸側（ガラタス地区）から陸軍で攻撃に加わった。ネストル・イスカンデルのこの記述は、包囲船初期にバルタオウルとザガンが、ガラタスをはさんで「二方面で」コンスタンティノープル北面（金角湾対岸）の攻撃を担当していたという同時代の他証言と一致する。PLP., no.64155.

海側から二方面にあたらせ、全市を包囲し、同じ時間、同じ刻限に海陸から町に攻撃を加えるように命じた。

5月26日、彼らのイスラームの祈祷僧が汚らわしい連中の祈りを叫びおわったとき、軍勢は突然叫びをあげて、町の城壁に猛然と突進してきた。大砲、銃器、堡籃、梯子、木製の塔、攻城用のそのほかのあらゆる道具を運んできたが、その数はわからないほどであった。同様に海からもたくさんの軍船、ガレー船が押し寄せて、あらゆる場所から町を砲撃しはじめた。彼らは堀に橋をかけ、城壁からすべての町の人々を払い落とすと、間髪をいれず木製の塔と丈の高い堡籃を運んできて、力づくで城壁にのぼりはじめた。ギリシア人たちはそうはさせじと、したたかにトルコ兵と斬り合った。パシャ、戦士たち、彼らの司令官たちはトルコ兵に無理強いし、大声をあげ脅しては彼らを殴って戦闘に駆りたてた。あらゆる位階の自らの軍勢とともにいた呪われたメフメトは、あらゆる楽器を吹き鳴らし、太鼓を打ちはじめ、激しい嵐のようにすさまじい雄たけびをあげさせながら、倒壊しかけた場所にやってきた。このような激しい勢いがあるならば、町はすぐにも攻略することができそうにさえ思われた。

たくさんの将軍たちがジュスティニアーニの救援のためにやってきて、トルコ兵たちと戦った。町の人々の犠牲もはかり知れなかった。しかしながら、まだ裁きのときは来ておらず、トルコ兵たちとわたりあうことができた。皇帝と貴顕たちは奔走してトルコ兵たちと町のあちこちで戦った。そして、涙を流し号泣しながら、貴族たち、将軍たち、あらゆる兵士たち、すべての民衆たちに、希望を捨てないように、意気消沈しないように、覇気と揺るがぬ信仰をもって敵と戦うように懇願し、そうすれば、神がお助けくださろうと励ました。そして、人々を集めるため町中の鐘を鳴らすように命じた。人々が城壁のきわに集まると、トルコ人と戦った。激しい斬り合いが起こり、両者の大胆さと勇気を見ることが怖ろしく、また、惨たらしかった。

総主教は、主だった聖職者全員とともに、聖なる大教会のなかにいて、たゆむことなく神といと清らかなる神の御母に、お助けがありますように、敵と戦う力を授かりますようにと祈っていた。彼らは鐘の音を聞くと、神々しいイコンを手にとって教会のまえに出て、祈りはじめた。十字架によって町全体を庇護し、号泣しながら言った。

「主なる神よ、蘇ってください。終末に臨み死につつある私どもをお助けください。自らの民を最後の最後まで拒まないでください。生きものを食う野蛮な連中に、自らの宝をわたし、辱めを加えるのにまかさないでください。連中に『彼らの神はどこにいる？』と言わせないでください。あの連中に、あなたこそが私たちの神、父なる神の栄光にある主イエス・キリストであることを知らしめてくださいますように。」

また、神聖なる神の御母にむかって次のように叫んだ。

「おお、聖なることかぎりなき女主人さま、立ち止まり、手を自らの息子、われらが神に差し伸べてください。女主人さま、私たちに向けられた神の怒りを鎮め、破滅からお救いください。いと聖なる女主人さま、私たちは地獄の口にあります。慈愛あふれる人間を愛する母よ、地獄が私たちを呑みこむまえに急いでわれらを救い出し、自らの右手で抱擁してください。聖なるすばらしき御名がみなに讃えられ、感謝されますように。」

このようにたえず叫びながら祈りをささげていたが、皇帝は城壁が崩落した場所に駆けつけ、激戦となっているのを見ると、自らはすべての貴顕とともにここに留まった。彼に神を知らぬ者の攻撃が報告されると、ただちに兵士たちに向かって叫んで泣いた。「おお、兄弟たち、友人たちよ。いまや、神の教会のために、正教の信仰のために、永遠の誉れを見出すときである。後代の者たちが記憶するように勇敢に戦おうではないか。」

そして、皇帝は馬に拍車をかけ、崩落した場所を飛び越え、キリスト教徒たちが流した血への復讐としてメフメトに迫ろうとした。彼の貴顕たち、武器を持った歩兵たちを駆り立てたが、これはふつう考えられないことだった。というのも、神を知らぬメフメトは厳重に守られていたからである。皇帝は剣を抜いて敵に向かい、肩といわず肋骨といわず手当たり次第に剣を振るった。トルコ兵たちを斬り、トルコ兵たちは皇帝の強さに恐怖し、ちりじりに逃げ、全軍離れ離れになった。

将軍たち、戦士たち、すべての人々は自らの皇帝を見て、みな奮い立ち、野獣のようにトルコ兵たちに襲いかかった。かくのごとくして、彼らは堀の向こうまで突き進んだ。メフメトは動ずることなく立ち、トルコ兵たちを殴ってギリシア人たちに立ち向かわせるように命じた。斬り合いは薄暗がりのなかでおこなわれた。なぜなら、トルコ側の矢が光をさえぎったためである。ギリシア人たちはふたたび城壁の両方の側から、トルコ兵に煮えたぎった樹脂を注ぎかけたり、樹脂に浸した木の束に火をつけて投げたりした。

すでに太陽が沈み、夜がきたが、戦闘はやまなかった。神を知らぬメフメトが数知れぬ松明をともし、自身があらゆる場所を駆け回り、叫んだり雄たけびを上げたりしながら、自らの兵たちを駆りたて、町を飲みこもうとしていた。しかし、城壁にいたギリシア人たちとほかの人々は勇敢さに包まれ、たがいに叫び交し合った。「兄弟たちよ、神に定められた場所に急ごう。聖なる教会のために死のうではないか。」かくのごとくして、彼らはトルコ人たちと執拗に真夜中まで戦い、彼らを城壁の上と側面から地に払い落とし、斬り合いが終わった。

とはいうものの、呪われたメフメトは町から撤退せず、自らの攻城用の塔とそのほかの兵具を直していた。翌日、ギリシア人たちはあらゆる場所でかれらの攻城具と木製の塔を焼こうとしたが、トルコ人たちはおびただしい弓と銃器から雨あられと射撃し、これを阻んだ。双方に戦死者が出た。負傷者はそれを上回った。誰がそれを数えることができようか。

信仰のないメフメトはその日の９の刻から、たくさんの大砲と銃器から崩落した場所めがけて町を砲撃するように命じた。そして、巨大な大砲をもってきて塔に砲撃した。同様に二度、三度、砲撃を加え、ついに塔を破壊した。このようにして、その日は過ぎ去った。夜が来た。ジュスティニアーニはふたたびそのあらゆる部下たちとフランク人たちとともに、塔を建てようとしはじめた。キリスト教徒たちの罪のゆえにそれは実現しなかった。大砲から砲弾が射撃されて、着弾しようとするとき石の砲弾がジュスティニアーニの胸にあたり、大怪我をさせたからである。ジュスティニアーニは地べたに倒れた。周囲のものたちがやっとの思いで水を注ぎかけ、彼の屋敷に連れ帰った。

彼とともにいた貴族たち、あらゆる人々、フランク人たちは呆然として、何をしてよいかわからなかった。これこそが、この町に最終的な破滅が訪れるという神のご意志であった。なぜなら、ジュスティニアーニはあの崩落した場所を大いなる奮戦と勇敢さで守っていたからである。じっさい、ジュスティニアーニは勇敢で賢く戦闘に長けていた。

皇帝にこのことが告げられると、皇帝はすっかり動顛して脱力し、矢も盾もたまらず彼のもとに駆けつけた。同様に、総主教、すべての貴顕と医者たちが彼の容態を尋ねた。できることならば、自分の魂を彼の身体に注ぎこみたいところだった。彼らは大いなる悲しみと悲嘆に包まれた。なぜなら、皇帝はジュスティニアーニをその信仰と勇敢さゆえに自らの弟と考えていたからである。医者たちはその日、終夜彼の命を助けるために努力し、砲弾によって打撲した胸はかろうじて治った。突然、胸の痛みが引いた。そして、人々はかれに少量の食べ物と飲み物をあたえた。彼はその夜、そのまま眠った。

塔に残ったジュスティニアーニの下僚たちは塔を建設しようとしたが、まったく間に合わなかった。ジュスティニアーニはふたたび自分をその場所に連れて行くように命じ、大いなる献身をもって塔を立て直しはじめた。しかしながら、すでに昼が来て、トルコ人たちが塔を建てている人々を見つけると、ただちにたくさんの大砲から彼らに砲撃をしかけ、建設の継続を阻んだ。ギリシア人たちが砲撃から身をよけようとしていると、たちまち多くのトルコ人たちが、崩落した場所とギリシアの軍勢のほうに押し寄せていた。烈しい戦がはじまった。

ある州総督がたくさんのサラセン人たちとともに、怒り狂ってギリシア人たちに攻撃をしかけた。そのなかに、背が高く目つきが鋭い5人の怖ろしい男たちがいて、町の人々を容赦なく打ち殺していた。一方、町からは厩守り[85]と彼の息子アンドレイが多くの人々とともに出撃してこれらトルコ人に立ち向かい、怖ろしい斬り合いになった。城壁のうえからこの5人のサラセン人たちが町の人々と激しく戦っているのを見ると、3人の味方が城壁から飛び降りてトルコ人たちに襲いかかり、彼らとしたたかに斬り合った。トルコ人たちはこれに驚き、この3人に殺されるのを恐れて彼らに手出しをしなかった。

町の人々は、ふたりのサラセン人たちを殺した。このように、たくさんのトルコ人たちが叫びながら彼らに攻撃を加えた。彼らは敵から身を守りながら町に退却した。3人の若者がいた。一人はギリシア人、もう一人はハンガリー人で、もう一人はアルバニア人だった。崩落した場所での斬り合いは止まず、いっそう激しさを増した。トルコ人たちは全力を挙げて突撃を敢行して斬り合い、町の人々を容赦なく追い散らした。将軍たちと貴顕たちはジュスティニアーニといっしょに一歩も引けを取らず勇敢にたたかい、双方多くの人々が戦死した。

神がお望みになったことは、避けることができないのである。槍が飛んできてジュスティニアーニを打ち、右の肩を傷つけた。ジュスティニアーニは死んだ者のように地に倒れた。そして、彼

---

[85] 中世ロシア語では«просторатор»で、この語は「軍務長官」と訳されることが多いが、もとは皇帝の騎馬を管理する「厩舎長官」であった。

の貴族たちと従者たちが、泣いて号泣しながら彼の身をかばってかがみこみ、彼の身体を離れたところに連れて行った。すべてのフランク人たちはジュスティニアーニにしたがって退いた[86]。トルコ人たちは人々の号泣と騒ぎを聞きつけると、いっせいに叫び声をあげ、全軍をあげて攻撃に転じ、町の人々を踏みしだき、彼らを打ったり、斬りつけたりしながら、町のなかに追いこんだ。将軍たちとすべての町の人々は、かくも大人数のトルコ人たちがいるのを見ると、逃亡しはじめたが、力づくで阻まれると、もどって敵たちと戦った。

もしも皇帝がその精鋭とともに到着しなかったならば、町に最終的な死が訪れていただろう。皇帝はやってくると、まだ息のあるジュスティニアーニと面会し、彼を思って激しく泣き、号泣して懇願しながら、フランク人たちに戦列に復帰するように頼みはじめたが、彼らは皇帝のいうことにしたがわなかった。皇帝はこの場に来て、彼らの柔弱さ、勇気のなさのために彼らを責めたが、逃げまわる者たちを連れ戻し、自らが陣頭に立ってトルコ人たちを攻撃した。皇帝は叫び声を上げて自らの軍勢を叱咤し、軍勢のなかに斬り込んでいき、肩や胸に剣で痛撃をあたえた。馬に剣が振りおろされたとき、馬は敵方を下敷きにして倒れた。馬の鎧も馬の力も皇帝の剣を押しとどめることはできなかった。トルコ人たちは口々に叫び声を上げ、たがいに呼び交わして皇帝に攻撃しかけようとしていたが、自分であえて皇帝と一太刀交えようとする者は一人としていなかった。彼に投げつけられた武器はすべて、まえに述べたように、何の功もあらわさずに落ち、皇帝のそばを飛びさり、皇帝に当たらなかった。なぜなら、その時がまだ来ていなかったからである。

かくして、人々はトルコ人たちを崩落した場所まで押し返した。その場所には、多くの敵たちがひしめきあっていたが、町の人々は彼らを数かぎりなく打ち殺し、豚のように串刺しにし、崩落した場所まで押しもどした。街路に逃げた者たちは、そこで殺された。かくして、神の思し召しにより、この日は町は救われた。トルコ人たちは町から離れ、町の人々は倒れふして眠った。その夜は何も起こらなかった。

皇帝は総主教、すべての戦士たちとともに大教会へと行き、神といと清き神の御母に大いなる感謝をささげ、皇帝をほめ讃えた。かくしてある者たちの証言であるが、ツァーリ自身が自らの心のなかで高揚していた。異教徒たちの撤退に望みをつなぐ者たちもいたが、神のご意志はわからなかった。メフメトは自らの軍勢がおびただしく倒れ、皇帝が勇猛無比であることを聞くと、その夜は眠りにつかず、大きな会議を招集した。海の道が開け、多くの艦船が町の救援に来るので、彼らは撤退しようと考えた。しかし、神のご意志が実現するように、その談合は決着がつかなかった。

その夜の第７の刻に、大いなる闇がこの町を覆いはじめた。高みにある空気が凝縮して、泣き

---

[86] 現代の研究者たちのなかには、ジュスティニアーニの傷はそれほど深刻なものでなかったとして、これを口実にジュスティニアーニが戦場から立ち去ったことを非難する者がいる。負傷したジュスティニアーニは、金角湾を隔てて対岸にあるガラタのジェノアの要塞へと運ばれた。

はらしたかのような趣で町のうえにかかり、大きさと見かけが水牛の目にも似た、大粒の赤いしずくを涙のように流した。それは長い時間地上にとどまっていたが、すべての人々は驚きのあまり絶望の淵にあり、恐怖に駆られていた。

総主教アナスタシオス[87]は時を移さずすべての合唱隊聖職者と元老院を招集し、皇帝の前に進み出てこう言った。「聡明ならびなき皇帝陛下、そなたはこの町について予言されたことをよくご存知でいらっしゃいます。そして、かように聖霊がはなれることもご覧になられました。そして、ご覧なさいませ、いまふたたび万物がこの町の滅亡を告げ知らせております。そなたにお頼み申しあげます。すべての者たちがともに死ぬことがないように、この町を出てください。神のためにこの町をお出になってください。」そして、彼らはかつての皇帝たちの、これに類する同様の事跡を皇帝に物語った。このようにすべての合唱隊聖職者と元老院は多くのことを皇帝に語り、皇帝が町から退去するように説いた。しかし、皇帝は彼らの言うことを聞かず、「神のご意志が実現しますように」と答えるばかりであった。

呪われたメフメトは、この町にかかる大きな闇を見ると、学者と僧たちを呼び出し、彼らにたずねた。「町にかかるこの大いなる闇は何か」と。彼らはメフメトに言った。「町が滅ぶという大いなる徴です。」神を知らぬメフメトはただちにすべての兵士たちに戦闘準備に入るように命じ、おびただしい数の徒の砲兵、大砲、銃器を前面に押し出し、そのあとにすべての軍勢をしたがわせた。

崩落した場所の真向かいに大砲を転がしてきて、この場所全体にめがけて砲撃を加えはじめた。歩兵たちは兵士たちがとおる道を整備し、堀を埋めるために駆けつけた。トルコ人たちは全兵力をもって攻撃し、町の人々を蹂躙した。なぜなら、騎兵たちが少なかったからである。将軍たち、重臣たち、すべての騎兵たちが到着すると、彼らは戦う人々を助け、トルコ人たちと戦った。皇帝はすべての貴顕たち、精鋭の騎兵たち、徒の砲兵たちとともに駆けつけ、トルコ人たちを攻撃した。すでに町のなかにはたくさんの敵の軍勢がいたので、彼らと混じって、重々しい、獣のような雄たけびをあげて斬り合い、彼らを崩落した場所に押し返した。

東のベイレルベイは大柄で力も強かったが、叫び声をあげながら東の全軍勢をもってギリシア人に攻撃をしかけた。彼は町の軍勢をかき乱し、彼らを押し返した。彼はみずから槍を手にとって皇帝に向かってきた。皇帝は盾をもって彼の槍をかわしながら、剣を脳天めがけて振りおろし、馬の鞍までこの男を切り裂いた。すると、たちまちトルコ人たちは口々に叫びながらこの男のところに屈みこみ、彼の身体を奪って運び去った。皇帝は自らの軍勢を呼び集め、口々に叫びなが

---

[87] 東西教会合同に協力した総主教グリゴリオス3世マミが、合同に反発する首都市民を避けてローマに亡命して以来、コンスタンティノープル総主教位は空位のままであった。「アタナシオス2世」なる総主教の存在を主張する記録があるが、実在は確認されていない。架空の人物であろうと考えられている。M. Philippides and W.K. Hanak, *The Siege and the fall of Constantinople in 1453. Historiography, Topography, and Military Studies, Surrey*, U. K./ Burlington, VT, 2011. pp. 49-50, 50, n. 136.

ら敵の軍勢のさなかに斬り込んでいった。敵を打ちつけながら彼らを町から追い散らした。

しかし、カラジャベイ・パシャは多くの軍勢を集めて突如襲来し、大いなる傲慢さをもって崩落した場所を攻撃し、町のなかに入って皇帝とすべての町の人々を追い散らした。皇帝はふたたび、将軍たち、すべての顕官たち、貴族たち、さらには民衆たちに懇願し、彼らを団結させて舞いもどり、トルコ人たちを攻撃し、もはや命を顧みず、彼らを城砦から追い払った。しかし、山を動かすことはできても、神の意志を変えることはできないのである。こう言われている。「主ご自身が建ててくださるのではなければ、家を建てる人の苦労はむなしい[88]。」トルコ人たちは数も多く、いれかわりたちかわり戦闘に繰り出してくるが、町の人々はいつも同じで、戦いに疲れて困憊しており、酔っ払いのように倒れていた。同様に、皇帝たちとすべての兵士たちはどこからも助けを期待できず、へとへとに疲れて思考も混濁して、大いなる悲しみと悲愁が彼らを押しつつんだ。

呪われたメフメトは東のベイレルベイが殺されたと聞くと、大いに泣いた。その勇気と機転ゆえに東のベイレルベイを愛していたからである。メフメトは怒り狂い、自らがその陣営の門をくぐってすべての兵力とともに出陣したのだが、大砲も銃器も皇帝めがけて照準を合わせることを命令した。なぜなら、皇帝が味方のすべての軍勢とともに城砦から出陣し、突如自らに襲いかかってくることを恐れたからである。こうして、神を恐れぬ者は戦場に到着し、崩落した場所の真向かいに立つとまっさきに、町の人々が後退するように、大砲や銃器から砲撃をおこなうことを命じた。

そのあと、多くの軍勢と3千のイェニチェリ部隊をつけてバルタウリイ・パシャ[89]を戦場に送り出し、彼らに死の危険にさらされても皇帝を生け捕ることを、さもなければ、銃器で皇帝を撃ち殺すことを命じた。将軍たち、顕官たち、すべての貴族たちは、信仰なきスルタンが多数の軍勢をもって到着し、含むところがあって一斉射撃をするのを見てとると、皇帝が無駄死にしないように戦場から連れ出した。彼はひどく泣いて彼らに言った。「私がそなたたちに言った言葉と誓言を思い出してくれ。私がそなたたちとともにここで死ぬことができるように、私を抑えたまうな。」彼らは答えた。「私たちみなが神の教会とそなたのために死のうではないか。」そして、彼の手をとり、人々のなかから皇帝を連れ出し、町から退去するように大いに説得していたが、彼と最後の接吻を交わし、呻き泣きながら、みなは持ち場にもどっていった。

バルタウリイがたくさんの軍勢とともに来襲したとき、将軍たちは彼を崩落した場所で迎え撃ったが、バウタウリイを抑えることができなかった。バウタウリイはすべての軍勢とともに町に入り、町の人々を攻撃した。まえにも増していちだんと激しい斬り合いが起こった。将軍たち、顕官たち、すべて貴族たちが倒れた。多くの人々のなかから少数の者たちが皇帝への報告のためにその場を去った。倒れた町の人々もトルコ人たちもその数が知れなかった。3千人隊は野生の

---

88 『詩篇』127章1節。

89 バウタウグルと同一として描かれているが、混同されていた可能性がある。

動物のように四方八方をうろつきまわり、皇帝を捜し求めた。呪われたメフメトはふたたびすばやく軍勢を整え、皇帝を見つけ出すために自らの兵たちをあらゆる通り、あらゆる門に送り出したが、自らはイェニチェリとともに陣営のなかにたてこもって、大砲や銃器をならべた。というのも、皇帝が怖かったからである。

皇帝は神のご命令を聞いたので、大教会に入り、地にひれ伏して神の慈悲と罪への許しを求め、総主教、すべての合唱隊、皇妃と別れを交わした。そして、皇帝は四方に跪拝して教会から出ていった。すると、その場に居合わせたすべての合唱隊、すべての民衆、数知れぬ女たちや子供たちが号泣とうめき声をあげ、いっせいに大声で泣きはじめた。それは、あたかもあの大教会が揺れ動くかに思われ、私が思うに、彼らの声が天に達するかのごとくであった。

皇帝が教会から歩み去ろうとするとき、皇帝はこのことだけを口にした。「神の教会と正教の信仰のために苦しみを受けようと思う者は、私とともに行くがよい。」そして、馬に飛び乗り、神を知らぬメフメトと出会うことを期待して黄金の門を指して進んだ。彼と行をともにする兵士たちはすべてで3千人におよんだ。皇帝は門のところで彼を待ちかまえるたくさんのトルコ人たちと遭遇した。皇帝は彼らすべてを打ち殺し、門へと進んだが、死体がたくさんあったために通り抜けることができなかった。すると、ふたたび大勢のトルコ兵たちが彼らのほうに向かってきて、彼らと夜中まで斬りあっていた。そして、かくのごとくして敬虔なるツァーリ、コンスタンティノスは5月29日、神の教会と正教の信仰のために殉難した。

生き残った者たちの話によれば、コンスタンティノスは自らの手で6百人以上のトルコ兵たちを殺した。予言されていたことが実現したのである。コンスタンティヌスによって町は建設され、コンスタンティノスの御世に滅びたのである[90]。時として、罪のために神の裁きによって報復されることがあるからである。悪事と無法は力強き者たちの玉座をも覆す。

おお、罪への刃の偉大なる力よ。おお、いかばかりの悪が罰を造りだすことか。おお、七つの丘のある町よ、そなたにとってのなんという災厄か。異教徒たちがそなたを占有するとは。なぜなら、あるときにはほかのどの町よりもそなたを讃え高めながら、あるときにはさまざまなやり方で何度も罰したり、幸いなる事績と栄えある奇跡によって教え導きながら、あるときは敵にたいする栄えある勝利によって誉めたたえながら、絶えまなく教え救済へと呼び招きながら、生活の実りによって慰めながら、あらゆるもので飾りながら、どれほど豊かな神の恩寵がそなたのうえに輝いたことか。同様に、我らの神、キリストの一点の誤謬もなき御母は、いついかなるときも言葉に表しようのない恵みと数かぎりない贈り物によって、憐れみ、お守りくださる。

しかるにそなたはそなたにたいする神のお憐れみと寛大さから身をそむけ、悪行と無法に身をゆだねた。そして、見よ、いま神の憤怒がそなたにたいして開かれ、そなたをそなたの敵の手にひきわたした。そして、このことについて誰が大泣きに泣き、号泣せずにいられようか。しかし、

---

[90] *Sfranze*, p. 446. 同様の記述は、コンスタンティノープル陥落を記した同時代のギリシア語短編年代記のいくつかにも見られる。

ふたたび先に述べてきたことにもどることにしよう。

皇妃はこのとき皇帝と別れたのち、修道女になった[91]。残った将軍たちと貴族たちは、皇妃と身分の高い娘たちと多くの若い妻たちを連れて、ジュスティニアーニの船や軍装ガレー船で島々やモレアスにいる従兄弟たちのもとに送り出した。人々は通りや屋敷でトルコ人たちに屈服せず、彼らと戦っていた。この日、多くの人々、女たち、子供たちが戦場に倒れ、ほかの者たちが捕虜になった。同じように、塔にいた兵士たちは塔をひきわたさずに二手に分かれ、町の外と町の中でトルコ人たちと戦っていた。昼に敗退した者たちは逃げて堀に隠れ、夜になると出撃してトルコ人たちを打ち破った。ほかの人々、女たち、子供たちは屋根の上からかわらのかけらや平板を投げつけたり、屋敷の木片に火をつけて火がついたままトルコ人たちに投げつけて、トルコ兵たちを大いに苦しめた。

塔も怖れられていた。サンジャクベイも何をしてよいかわからず、スルタンに使者を送った。「もしもご自身が城砦へとご出馬なさらないならば、城砦は落ちないでしょう。」スルタンは皇帝と皇妃を探し回ったが、自らはあえて町のなかに入る勇気がなく、あれやこれやおおいに悩んだ。そして、戦闘で捕らえ、パシャたちの捕虜となった貴族たちと将軍たちを呼び、彼らに固い約束と贈り物をあたえ、パシャたちとサンジャクベイたちとともに使いに出して、あらゆる通りにいる町の人々、塔に立てこもる人々に誓言をもってスルタンの言葉を言わせた。いわく、「あらゆる恐怖を捨て、人を殺すこともなく、捕虜にすることもなく、戦闘をやめるがよい。さもなければ、おまえたちはみな、お前たちの女たちも子供たちも剣の餌食になるだろう。」

このことがあって戦闘はやんだ。すべての者たちは貴族たち、将軍たち、パシャたちの手に身をゆだねた。そして、これを聞いてスルタンは欣喜雀躍して町の通りや広場を清掃させるために人を遣わせた。11 日目にスルタンは不意打ちを未然に防ぐために、あらゆる通りに多くの人々をつけてサンジャクベイたちを派遣した。一方、スルタン自らはあらゆる身分の近習たちを連れて大教会の聖ロマンの門に入場した。大教会には、総主教、合唱隊全員、数知れぬ民衆、女たち、子供たちが集められた。

スルタンは大教会前の広場に来て馬を降り、顔を地面に伏せて一つかみの土を取って頭に振りかけ、神に感謝をささげた。そして、この巨大な建造物に賛嘆してこう言った。「真実、この人々がここにいてそこから出てきたのだ。これに類比するものはこれ以後にはできないだろう。」それから、スルタンは教会に歩を進めた。神の聖所のなかは混乱を極めていたが、スルタンはその聖なる場所に立った。総主教、合唱隊全員、民衆は涙を流し、号泣し、スルタンのまえに倒れ伏した。

---

[91] コンスタンティノープル陥落のとき、コンスタンティノスは妻をすでに亡くしていた。彼は2 度結婚し、2 度とも妻に先立たれていた。ここでは、口碑が反映されているか、物語の作者が伝統的な語りの定型に則り、未亡人の剃髪というモチーフを入れたのか、どちらかであろう。*Sfranze*, pp. 102-118; 平野訳『回顧録』(2-1), p.52,59: (2-2), pp. 53-54.

スルタンはやめるように手で合図をして言った。「アナスタシオス、そなたとそなたに仕える者たちみな、さらに、すべての民衆たちに告げる。今日このときからそなたたちは私の怒りも、殺されたり捕虜にされたりすることをも怖れる必要はない。」そして、パシャたち、サンジャクベイたちに向き直り、すべての軍勢、朕の部下のすべての近習たちにこれを禁ずるように、すべての町の人々、女たち、子供たちを殺したり、虜にしたり、そのほかの害をもたらす行為をいっさいやめるように命じた。「もしも誰かが朕の命令に背くならば、死罪に処する。」そして、それぞれが自らの家にもどるように解散を命じた。というのは、スルタンは教会の美しさと宝物を見たいと思ったからである。それは予言されたことが実現するためであった。「自らの手を聖なる受難の遺物に手を置き、聖なるものを要求し、息子たちには死をあたえる。」

人々は9の刻になってもまだ教会から出てきており、教会のなかにはまだたくさんの人々がいたが、スルタンは待ちきれずに教会から出た。スルタンは、広場が教会から出てきた人々でいっぱいになり、通りという通りが人で溢れているのを見て、これだけの人々が一つの教会から出てきたことに驚き、皇帝の宮殿に行った。

すると、そこで一人のセルビア人がスルタンのことを認めて、皇帝の首を彼にもっていった。スルタンはたいそう喜び、すぐに貴族たちと将軍たちを呼び、これが皇帝の首であるかどうか、自分に真実を告げるように訊ねた。彼らは恐怖に捕えられながらスルタンに言った。「これは皇帝の首である」と。スルタンはその首に接吻しながら言った。「神はそなた、真実の皇帝の姿を明らかにして世に示したもうた。何ゆえにそなたはそのように無駄死にしたのか。」そして、スルタンは皇帝の首を総主教に送り、金と銀でそれを飾り、自分自身だけが知るようにそれをしまっておくよう命じた。総主教は首を受けとり、金箔を張った銀製の小箱にそれをしまい、大教会の玉座のしたに隠した。私たちはまたほかの者たちから、黄金の門のところで皇帝とともにいた者のなかで生き残った者たちが夜、皇帝の首を盗み、それをガラタスにもっていき、そこにその首をしまったと聞いている。

皇妃にかんして、大規模な探索がおこなわれたが、大公、親衛隊長、執政官、厩守りの息子アンドレアス、その甥アサネス・トマス・パレオロゴス、帝都総督ニコラオスが船で皇妃を逃した。スルタンはただちに彼らを拷問にかけたのち、首をはねるように命じた。

このようなことが生じ、かくのごとき事態が出来したのは、私たちの罪ゆえのことである。無法なるメフメトは、日のもとで誰よりも生まれ正しき皇帝の玉座に座し、宇宙のふたつの部分を所有する人々を支配し、さらに、海路をものともせず闘いによって領土を広げてきた、誇り高きアルタクセルクセス[92]を倒した者たちを凌駕し、74人の王によって守られたかの妙なるトロイア[93]に打ち勝った人々に打ち勝った。

---

[92] ペルシアの王（紀元前465-424年）。

[93] トロイア戦争について述べているが、トロイアが「74人の王に守られた」という記述の典拠はわからない。A.C. オルロフは、13世紀イタリアの詩人、グイード・デ・コルムナの『トロイア物語』の影響があると述べてい

しかしながら、呪われた者よ、たとえパタラのメトディオスと至賢のレオンによって予見されたすべてのこと、この町についての徴が現実のものとなったとしても、最後の予言は避けてとおることができず、それがそのまま実現することになるだろう。というのは、こう書かれているからだ。

「ルーシの種族が、かつてこの町を建設した者たちとともに、すべてのイシュマエルの裔[94]に打ち勝ち、かつて法に則ってこの町を支配していた者たちとともにそれを占領し、この町に君臨し、5番目と6番目の種族であるルーシ人たちは7つの丘のあるこの町を押さえ、この町を大いに栄え賑わわせ、彼らから奪って腹のくちくなるまで食し、その聖者たちのために報復するだろう。」

また、『ダニエル書』の最後の夢には、こうあるのだ。「そして、偉大なるフィリポスが18の民族たちとともに立ち上がり、7つの丘があるこの町に集まり、いまだかつてない戦闘がはじまり、7つの丘のある町の窪みといわず、通りといわず、人間の血が川のように流れ、海峡にいたるまで海が血のために濁った。このとき、ヴォヴスが泣きわめき、スケロラフが泣き叫び、スタフォリンがこう言う。『立ち上がれ。立ち上がれ。そなたたちに平安を、敵たちに報復を。7つの丘の右手に出て、二つの円柱のあいだに立つ一人の人間を見つけるがよい。この人間は白髪を戴き、慈悲にあふれ、乞食のような身なりをし、目つきが鋭く、気配りはやさしく、中背で、右足の脛に徴がある。彼を連れてきて、皇帝として戴冠させるがよい。』

そして、命もたらす4人の天使たちがこの人間を連れ、彼を聖なるソフィアに導き、彼を皇帝として戴冠させ、右の手に皇帝の武器をもたせて言うだろう。『男らしくふるまうがよい。自らの敵に打ち勝て。』すると、皇帝は天使たちから武器を受け取り、ムスリム、エチオピア人、フランク人、タタール人、あらゆる種族を打ちのめすだろう。皇帝はムスリムたちを3つに分けるだろう。はじめの者たちは武器によって打ち勝つ。第2の者たちは、洗礼を受けさせる。第3の者たちは、大いなる憤怒をもってエディノドゥブノエまで追い払う。皇帝が帰る道すがら、地の宝が開かれ、あらゆるものを豊かにするだろう。乞食は一人もいなくなるだろう。地は7倍の実りをつけるだろう。武器は鎌になるだろう。そして、この皇帝は32年間、君臨し、彼のあとには、同じ血筋のほかの者が登極するだろう。かくして、この皇帝が自らの死を知ったとき、自らの王国を神にささげるべくエルサレムにゆく。そのときから、彼の4人の息子たちが君臨することになる。第1の息子はローマに、第2の息子はアレクサンドリアに、第3の息子はセドゥモホルム（7つの丘）に、第4の息子はテッサロニキに[95]。」

る。この作品は、この時代すでに中世ロシア語に訳されていたが、74人の王という記述はない。

[94] ムスリムのこと。

[95] ここでは、預言者ダニエルの夢にかんするアポクリファ著作が広範にわたって引用されている。中世においては、諸民族の未来と世界の運命についての多くの予言が、ダニエルの名前と結びついていた。この予言のなかで言及されている名前は、歴史上の人物と同定するのはきわめて難しいと、トヴォロゴフは考えている。

これらすべて、そして、ほかの多くの予言と徴が、神の都よ、そなたについて書き記されている。もの惜しみなき善き全能なる神が、神を知らぬオスマンのこの汚らわしき信仰を打ち砕き、蹂躙し、すべての無垢のキリスト教正教信仰を甦らせ、揺るぎなくするために、これらの予言を実現されますように。いまも未来永劫、永遠に。アーメン。

これらのことを書いたのは、私、罪多く無法なるネストル・イスカンデルである。私は、若き頃より虜囚となり、割礼を受け、長いあいだ軍事遠征に参加して辛酸をなめ、この呪われた信仰のなかで死ぬことがないようにと、あちらこちらを身をひそめて過ごした。この偉大なる恐ろしい事件のなかで、私はあるときは病の振りをし、あるときは隠れ、あるときは自らの友人に匿われ、いまにいたるまでとにもかくにも生き延び、あらゆることを検討し、すべてのことについてつぶさに見きわめる時を得て、トルコ人たちによって城砦の外側でおこなわれたことを、毎日毎日書きつづけたのである。そして、その後、神の黙過によって私たちは城砦のなかに入り、敬意に値する偉大な男たちから、信仰なき者たちにたいして城砦のなかで行われた事績について、時にあたって話を聞きおよんで集め、手短に述べて、このきわめて恐ろしい驚くべき神のご意志を記憶にとどめるべく、キリスト教徒たちに語り伝えたのである。生を生みなす全能の三位一体が、ふたたび私を自らの牧草地の羊たちの群れのなかに加えてくださいますように。私が偉大なるいと高きそなたのお名前を讃え、感謝を捧げることができますように。アーメン。

刊本

翻訳に使った刊本テクストは以下のものである。

«Повесть о взятии царьграда турками в 1453 году» (Подготовка текста, перевод и комментарии О.В. Творогова) // Библиотека литературы Древней Руси. Т. 7. СПб. 1999. С.26-71, 493-498.

«Повесть о взятии царьграда турками в 1453 году» (Подготовка текста, перевод и комментарии О.В. Творогова) // Памятник литературы Древней Руси. Вторая половина XV века. М., 1982. С.216-267, 602-607.